

35
205

一週世界

傳道

不村清杏著



東京
警言醒社書店發行

EVANGELISTIC TOUR
OF THE
WORLD.
—
H. S. KIMURA.

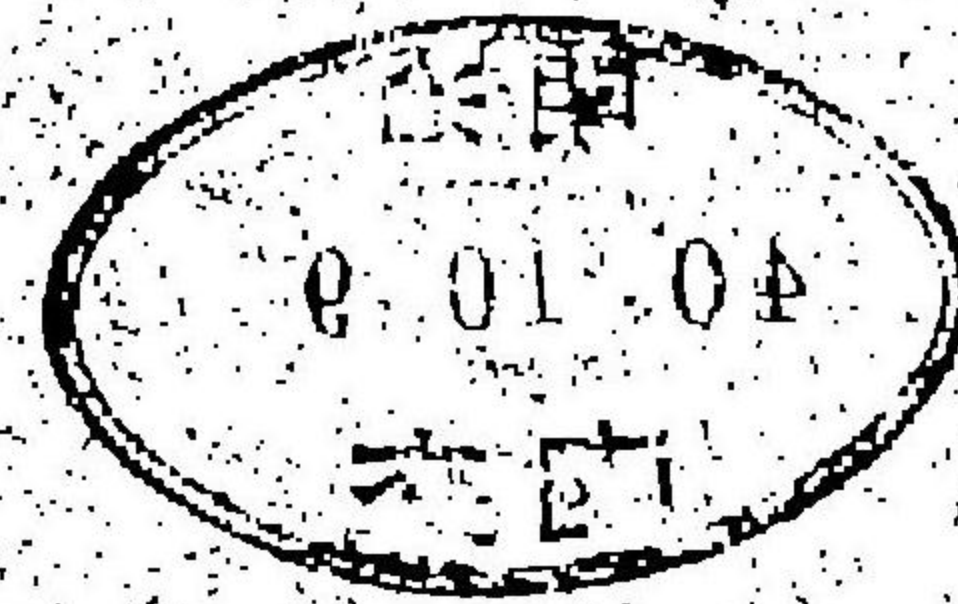


旅行





傳道旅行序



傳道旅行序

明治二十三年の頃と覺ゆ、新潟なる北越學館へ入學する田舎的の一少年あり、蓬髮短衣、傍若無人に里言を吐き、予をして可笑しく感せしめたることありき。斯くて其後運動會に臨んで、此少年の動作を観るに、此少年たる、毎に身を挺して奮闘し、所謂屠龍搏虎の概を示すところ、予をして其の勇士たるを知らしめぬ。更に又た之れあり、予一夕月明に乘じ杖を曳て海濱に出で、遙かに北海の波濤を眺め、遠く故山の空を望みつゝ、思はず感慨に驅らるゝとき、傍に人聲あり、驚て顧れば、我

傳道旅行序

二
が二三の學生なり、いづれも毛布を沙上に敷き、或は臥し、或は座し、或は吟じ、或は黙し、各々感想を天地の間に寄するもの、如くなりき、而して彼の少年も亦此中にありき、予れ於此乎、更に此少年に優雅の質あるを悟りぬ。

予が北越學館を辭して東上せし以來、また此少年の消息を知らず、唯だ其後受洗して基督教信徒となり、北越を去て、仙臺に赴き、目下東北學院に學びつゝありと聞きしのみ。然るに一日、熊軀獅頭の一壯漢あり、來りて東都なる予の寓を叩き、暫時暈を定めて予の顔を眺め、而して曰く、先生予は今より去て渡米せんとす、即ちお

暇乞の爲めに來れるなりと。因てつらく之を視れば、即ち彼れ數年以前の少年なりき、於此乎、予は喜びつゝ、答て曰く、善哉君の鵬翼を彼岸に搏んとするや、而かも君は何人よりか紹介を得たるや、若夫れ之れなくんば、予も桑港に知人なきにあらず、或は君の爲めに其勞を取らんかと、然るに彼れ其頭を掉て曰く、否々、予には神の紹介あり、また人の紹介を要せざるなりと、斯くて彼れ將に去らんとするとき、つらく予の喫煙するを凝視して、而して曰く敢て先生に忠告す、請ふ今日より喫煙を廢せよ、是れ先生にも傍人にもよろしからざるものなりと。

嗚呼此少年とは誰ぞ、此壯漢とは誰ぞ、木村清松君其人なり。

更に又た其後の出来事を言はんか、木村君は米國より時々消息を洩し來りぬ、然れども其詳細を知るに由なく、唯だ其後救世軍に入り、更に轉じてムーデーの學校に學び、専ら傳道の爲めに盡しつゝありしと聞きしのみ、而して予よりは傳道も大切なれども、學業をも亦た怠るべからずと注意せしことあるを覺ゆるのみ。然るに其後數年立派なる一紳士あり、更に又た予の寓を叩けり、因て出で迎ふれば即ち木村君の米國より歸朝せるなり、因て予は先づ問ふて曰く、「木村君、君は嘗て神の紹介あり、

人の紹介を要せずと言へり、桑港に着して後、果して困難に會はざりしや否や」曰く「聊か之れなきにしもあらざりし」と、而して其語るところは、大要此の如し、即ち君は桑港に着するや、直に救世軍の本營に至り、而して曰く、「予れ神の紹介を得て、今や日本よりこゝに來れり、君請ふよろしく予を容れよ」と、然るに少佐其言を解せず、更に君に問ふて曰く「君は日本より何日こゝに來りしや」曰く「只今着せり」「君は何人の紹介を携て來りしや」曰く「人の紹介は之を携へず、只だ神命によりて此に來りたるなりと、於此乎、少佐驚て謂らく、是れ狂人なりと、而て直に彼れを逐はんとせり、而かも彼れ

六
は巍然とし之れに應せず、只だく、神命を繰返せり、
於此乎、少佐更に彼れに問て曰く「然ば君は何事をか能
くする、コックたるを得るや」曰く「能はず」園丁たる
を得るや」曰く「能はず」然ば「某々の仕事を爲し得る
や否や」曰く「左様なることは其一をだも爲す能はざる
なり」と、於此乎、彼更に更に驚き且つ呟て曰く、「然ば
君は一体自ら何事を能くすと爲すや」と、因て木村君は
答て曰く「予れに只だ一つの能くすべきものあり、予は
基督の爲めに生命を捨つべし」と、少佐於此乎、初めて
其言に服し、直に彼れを其仲間に入れしに、彼れは其後
白人間に傳道し、數多の墮落者を救へりと云ふ。

明治三十九年即ち昨年の春、木村君更に歐米に遊ばん
と欲する志を洩す、於此乎、予大に其舉を賛し、而て曰
く「請ふ行て最近に於ける歐米なる基督教界の状況を視
察し、かねて世界の人情風俗にも觸れ來り、更に大に我
國の傳道界に貢献するところあるべきなり」と而して行
て此書成りぬ。若夫れ各國各地に於ける君の豪行壯爲、
快談奇遇、時に風月に對し、時に山川に對し、時に露人
と相睨み、時に英人と相携へ、時にエルサレムの空に使
徒を偲び、時にベツレヘムの村に舊跡を尋ね、無限の感
慨と無量の教訓とを得たるの土産は皆收めて此書中に在
り。嗚呼十六七年以前の一少年遂に日本の教化に貢献す

るの一名士とはなれり。嘗に木村君の爲めに祝するのみならず、又た日本の爲めに祝せんと欲す、乃ち謹んで序す。

八

明治四十年八月

松村介石識

叙言

主曰はく「爾萬國に往きて福音を宣へ傳へよ」と。余元と片々たる一青年、この大命の實行者としては、餘りに小さく又た能足らざる者也。然れど余は撰ばれて傳道者たり、若し上よりの恩祐あらば、其幾分を爲し能ふべく、また此祐助の必ずあるを確信し、奮勵して途に上れり。幸にして恩祐は確信の如く下り、先輩は與ふるに、深厚なる好意を以てせられたれば、余は何の願慮する所なく、豫期以上の靈戦をなせり。

本書は即ち其紀行の梗概を叙せるものにして、之を公にしたるは、此の大なる恩祐と深厚なる好意を謝し、永遠に之を紀念せんが爲めなり。

余元と不文、辭句を修飾して世に誇る能はず、否これ余の欲せざる所、又た街奇事大人を驚かすが如きを欲せず、故に叙述は凡て有の儘也。

されば讀者にして、麗辭佳句に接せんとし、或は怪談奇譚を聴かんと欲して此書を繙かば必ず失望せん、讀者請ふ先づ之を諒せられんを。

若し此一小冊子にして、讀者の靈性上に、多少の裨益を與へ、福音の道しるべとなり、神の榮光の幾分にて、も顯頌するを得ば余が望み足る。

終りに臨み、仰ひで優渥なる祐助を垂れ給ひし皇天に感謝し、深厚なる好意を與へられし、内外各地の先輩及知友に對し、恭く敬意を表す。

明治四十年七月 東京府下千駄ヶ谷にて

著者 木村清松 識

本書は即ち其紀行の梗概を叙せるものにして、之を公にしたるは、此の大なる恩祐と深厚なる好意を謝し、永遠に之を記念せんが爲めなり。

余元と不文、辭句を修飾して世に誇る能はず、否これ余の欲せざる所、又た街奇事大人を驚かすが如きを欲せず、故に叙述は凡て有の儘也。

されば讀者にして、麗辭佳句に接せんとし、或は怪談奇譚を聽かんと欲して此書を細かば必ず失望せん、讀者請ふ先づ之を諒せられんとを。

若し此一小冊子にして、讀者の靈性上に、多少の裨益を與へ、福音の道しるべとなり、神の榮光の幾分にて

顯頌するを得ば余が望み足る。

終りに臨み、仰ひで優渥なる祐助を垂れ給ひし皇天に感謝し、深厚なる好意を與へられし、内外各地の先輩及知友に對し、恭く敬意を表す。

明治四十年七月 東京府下千駄ヶ谷にて

著者 木村清松 識

旅行順序及日數

四

明治三十九年四月二十六日 出發

同 年十月三十一日 歸京

△橫濱	一日間	△佛國、瑞國	七日間
△往航船中	十三日間	△地中海	四日間
△北米合衆國	四十七日間	△埃及	三日間
△加奈太	二十日間	△パレンスタイン	十七日間
△米英間航海	八日間	△復航、沿岸寄港	卅五日間
△大英國	三十三日間	△(附記)歸省	十二日間

目次

旅行の理由及梗概……………壹

往航十三日間……………一

發程||三等室の同胞||船中の初演説||約翰三ノ十六||船中の第一聖日||生命ある祈禱||送別會の奇觀

米國の六十七日……………二四

最初の改悔者||恩寵の下||シヤトルの鬱林||白人改悔の初穂||感慨多きセントルイス||女子大學に於ける説教||愛の一字||ハートとポツケット||女學校卒業式||綿の財布に五十兩||シカゴの懷舊||日本の婦人||シカゴに於ける傳道||齒醫者の厚意||郊外傳道の故地||ナイヤガラの巨瀑||九十九の羊||トローレー博士の活動||月下の清遊||轉戰の愉快||病犬の教訓||故師の紀念地||教會員の運動會||靈的活動||紐育市に入る||美しき市街||獨立閣上の感慨||東奔西馳

目次

一

歐洲の四十八日……………九二

英國に向ふ―余は基督教信徒なり―無線電信―船中の傳道―ケ
イック―湖畔の個人傳道―リバイバルの中心―グラスコ市―ジ
ン、ノックスの故地―シンブソン博士を訪ふ―安息日の蘇格蘭―東
郷―木村―ウエルズに赴く―クリスチャン國―鑛泉―獨舞臺―バ
ーミンガム―英都倫敦―有名なるハイトパーク―馬車屋の路傍傳道
―博覽會見物―呀巴里市―咀はるべき市街―世界のバラダイス―地
中海第一港―言語不通の不便……………

埃及の七日……………一四三

地中海上―説教なき禮拜―海上の靈戰―カイロ府に向ふ―「ヤボニ
―來る」―ナイル河―ピラミット―スプフィンクス―パロ王の墓跡―
宛然陰府の陳列所―カイロ府に於ける講演
パレスティンの十七日……………一六二

露船に搭す―谿河の鹿―「エルサレム」―聖地に於ける第一の聖日

―迫害當日の追懷―泣き石―ヘブロン之夜―マリヤ、マルタの故地
―貧者ラザロの墓―「バクシェーシ」と「エムシー」―救主降誕の地？
―「此あたり」？―銀貨の手工品―ベツレヘムの夜半―エルサレムの概
観―死海に泳ぐ―是れヨルダン川か―號泣塔―流石に聖地の民―キ
リストの墓所―地獄谷と唯一の泉―ソロモン宮殿の石材―橄欖山と
昇天閣―キヤルバリ山頭の祈禱―聖地に於ける第一の悔改者―サマ
リヤに向ふ―イエスの見失はれし地―土人の嫁入―ナザレの結婚式
―ナザレの概観―イエス住居の跡―マリヤの井戸―異邦人の傳道―
カナの婚筵懷古―垂訓の山と山上の城―二魚五麵の地―ガリラヤ湖
上の感慨―佛國船の便乗拒絶―二賊現出―聖地を辭す……………

復航二十五日間……………二三七

スエスの運河―船中の一―エデンの港―土人に追はれし宣教師―
家族を殺害されし宣教師―船中の角力―木村一流の柔術―次は足相
撲―食堂に於ける傳道説教―音樂會と賞品授與式―コロンボ港―寺

院を訪ふ—コロシボの乞食—海岸の奸商—牀面の價?—聖書研究に
 勤む—ピリナシ上陸—土人の風俗—新嘉坡—ジャバニースハウス
 —惨憺たる九龍—香港—浪怒り風吹ゆ—上海—母の大病—懐かしき
 日の本—長崎に於ける講演—石炭運び人足—船中最後の説教—神戸
 —出發點に歸着—我がホームの團欒

(附記) 歸省……………二九一

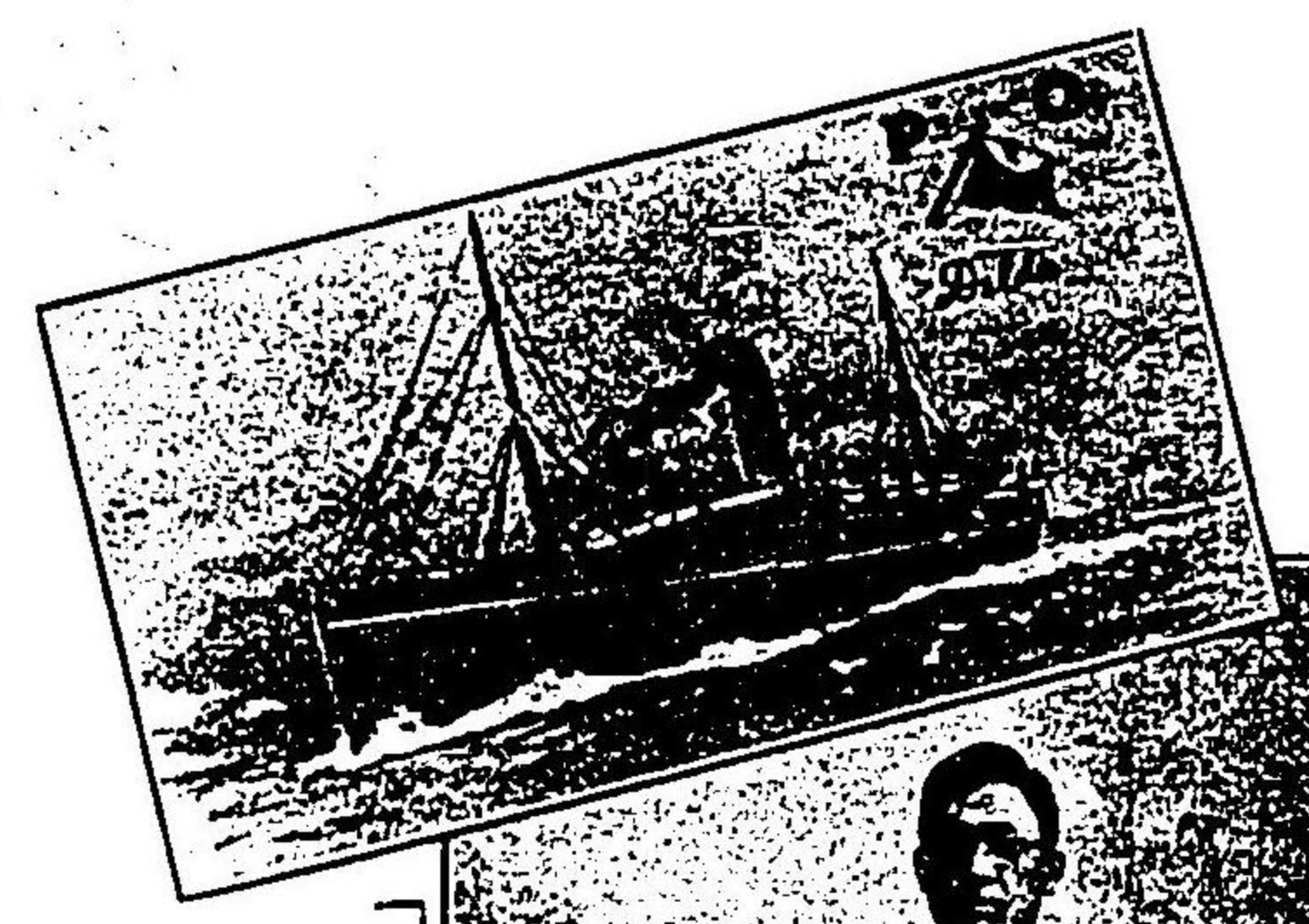
七年前歸朝の際



世界一週に出發の扮装



「余は自分に運へぬ荷物は持たぬ」

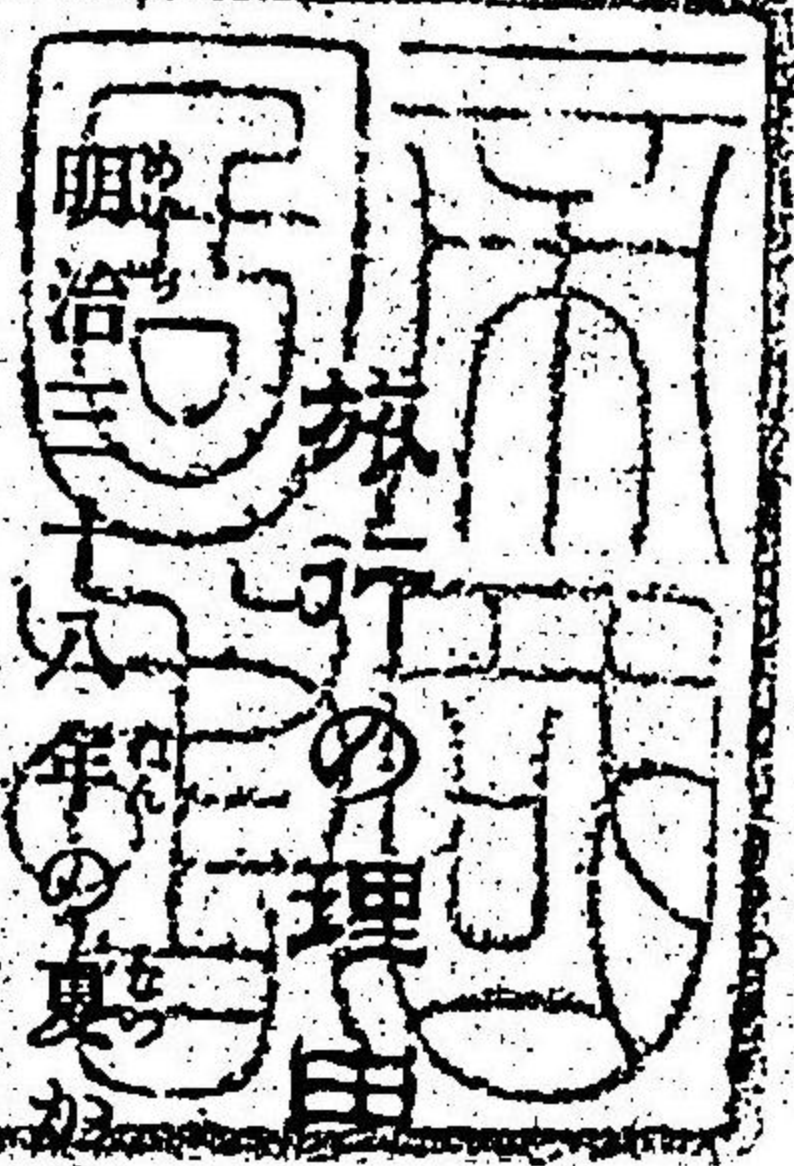


始めて洋服つけて渡米

世界傳道旅行

木村清松 著

及梗概



明治三十八年の夏から、同廿九年の春に至る約七ヶ月の間、余は東京衛成病院戸山分院の収容患者を慰問して傳道説教を試み、また各種の學校及び處々の教會で説教し、或はまた軍人同情會を起して之が爲に奔走し、日々平均六七回説教や講演をした爲に、身神に少からざる疲勞を覚え、余がエチルデーも爲に燃へ盡さんとする感が

旅行の理由及梗概

壹

あつたので、心氣轉換の必要が生じた。そこで三四ヶ月間北米の自由郷に遊び、日頃の疲勞を癒すと共に、靈的戰鬥の勇氣を恢復せんとした、併し主もし許し給はゞ一週を試みんとする志なきにもあらずであつた。

然るに愈々出立すると、休養は來らずして、却て活動が來た。先づ船中に於て百四十五名の同胞に對して神の福音を叫び、目的地に着するや、これ日も足らずに各處に轉戦し、次で歐洲にも航し、更に聖地を訪ひ親しく主イエスが辿り給へる跡を踏み、且つ傳道を試むる様になつたのである。

さて余の北米に着するや、出立ちたる第一の戰場は、

先年多大の恩寵を受けたセントルイス及び母校ムーデー氏の設立した學院の所在地シカゴである。時恰もトロー、アレキザンダーミッションは、加奈太の首府アトワ市に開かれて居つたので、余は直に之が靈的戰鬥に従軍し熱心に働いた。斯くする中、ケゾイックコンヴェンションからも招聘が來た。扱ては茲に於て余の初の祈はきかれ世界一週が出來さうになつた、するとまたウエールズのリバイバルに招かれ、更にスウヰツルランドのルザン市其他に至り、轉じて地中海を横ぎり、ポートセットより埃及に入りて、金字塔其他を尋ね、再轉して聖地パレスティンを旅行し、聖き舊蹟を尋ね、其昔を偲んだこ

と三週間。

四

斯くて聖地を辭し、再びポートセツトよりスエスの地
峽を通り、印度、眉南、新嘉坡、香港、上海を経て各人
種と風物に接し、長崎神戸を経て、最初乗り出した横濱
埠頭に着し、直に東京に歸着した。日を経ること一百八
十八日。

往航十三日間

發程

朝な夕な、遙かに仰ぐ富士の高根に暫しの別れを告げ
愛する家族に送られて千駄ヶ谷の寓居を發し、東京を離
れて鐵路一瞬、我國の立關口なる横濱に至り、福井屋に
一休みして後、車を驅り波止場に赴きて、黒煙を吐きつ
つ、悠然小山の如く横はつて居るエムプレス、オプ、インデ
ヤ號に身を托したのは、一千九百零六年四月廿七日午前九時
先年渡米の際は下等でしたが、今回は中等にしました

發程

一

余はまだ上等で行く紳士でない、さらばとて下等も少々
閉口する、凡べて物は中庸が大切だから、余は中等に乗
り込みました。此の次には是非上等に乗りたいもので
ある。余の室は四人一組であつて、皆な同胞、そして向
ひの室にも四人の同胞が居つた、余が同室の中二名は信
徒であるが、唯だ他の一人は未信者であつたので、どう
かして此人を米國に着する前に悔改させたいと欲したの
が、抑も船中傳道の端緒であつた。
陸に居る時は虎の如く勇む木村も、海上ではまるで濡
れ猫と同様、非常におとなしかつた爲め、何處に木村が
居るか、人には判らなかつた、否な實は自分さへ判から

二

なかつた位である。又常には大食家と信じて居つたのに
今は小食家を通り越して、絶食せねばならぬと云ふ様で
實に見るかげもなかつたのです。けれども三日経ち、四
日経ちする中に、風も穏かになり、波も静まり、而して
氣分も段々と元に復へり、哀れな猫は次第に虎に代つて
來ました。

三等室の同胞

斯く元氣を回復した余は、三等室に百四十五名の日本
人が居ると聞いたから、早速其處に往て見た。處が三等
室は即ち三等であつて、甲板の下のまた其下にある、そ

三等室の同胞

三

して空気の流通する處としては階子段のある昇降口の外はない、船側に小さい丸窓があるけれども、少し波があれば直ぐ閉めなければならぬ。余はそこへ入り込んで見ると、一種厭な臭気が紛として鼻を打ち、何とも云はれない厭な氣持がした。扱愛する同胞は如何と見渡すと、ウーン／＼唸つて居る者もあれば、思ひ掛けぬ小間物屋を開いて居る者もあり、大欠伸をして居る者もある、そうかと思へば密柑を食つたり、鐵砲水を呑んで居る者もあるし、コスメチックと鏡と櫛を手より放さず、絶すおめがしをするハイカラ先生もあれば、大軒で華胥の國に遊んで居る氣樂者もあり、胴間聲を揚げてABCを吐鳴つて

四

居る漢もあるなど、十人十色各自が意の儘をして居る。余は之を見ると同時に、是非此人々に神の福音を傳へねばならぬことを直覺した。依て其中に居られた二人の傳道師に相談して、説教會を開かふではないかと申すと二氏は「是等の人々の中には、三四回も渡航して居る者も居るし、無頼漢も居る、斯様な人に尊い神の道を傳へたどて駄目である、豚に眞珠を與へると同様だから、止す方が良からう」と答へられたので、余もグンニヤリして、其儘室に歸つた。さて室に歸つて良く考へて見るとこれはいけない、自分の今度の旅行は「キリストの爲め」てふ標語の下にするのであるのに、船中で一回の説教も

爲なかつたでは申譯がない、こんなにグツグツして居る中に、悪魔に機先を制せられはしまいかと思つた時には余が心に一大鐵槌を加へられた様に感じたのである。斯く感ずると同時に、熱心に祈りましたが、俄然、余の勇氣は恢復され、又精神を満され、思はず知らず「ナニ遣れ〜」と叫んだのである。

船中の初演説

翌日、上より受けたる勇氣を以て三等室に入り込み、劈頭第一に軍歌を高唱した。

まことの爲め、十字架の軍旗を押し立て、

エスの御名を耻とせず、歌ひつ進め、

進め〜、キリストの爲に、

生命をも棄て、働き進め！

之を六七回繰返すと、百數十名の人々は不審議なおも、ちで集つて来た。余の精神ははや盤石の如く燧石の如く堅くなり、鋼を之に當てるならば、爛々たる火光を發する心地した。これキリストの爲めならば、生命をも棄て働く大決心を起し、一生懸命になつたのである。艦で口を開いて「諸君よ」と言ひ出すと、此人々は案外にも眞面目に聴てくれたのは、實に感謝すべきことであつた。余は先づ何故に米國及び加奈多政府が、日本人

に對して眼の検査が特別に劇しいかを説き、次で上陸後の心得より、米國の事情を語つた『日本人の眼の悪いことは世界で二番と下らない譯は、少くとも六つの原因ある様に思はれる、其一は未だ傳りをして貰はねばならぬ様な六七歳の幼兒に赤ン坊をおんぶさせ、夏の真中、市街で遊ばせるから、日光は寢入つて居る顔に遠慮なく直射して視力を弱めさせる、次は田舎の家は多く煙突がないから、火爐から揚る煙が終日家の中に満ちて居る、其の煙の爲め、其四は男女の混浴が原因となりて此病が感染する、其五は宗教上の迷信である、余四五年前、四國傳道の際、金毘羅に遊んだ時の事、社の構内に青銅の馬

が備へ附けられて居た。すると眼の悪いお婆アさんがやつて来て、眼病のはやく癒る様にと祈りながら、自分の目を擦つた手で、馬の眼を擦る、斯くすること十數度で去ると、今度は年の頃十六七な娘が来た、此女の眼は恰ご慈姑の様であつたが、また前のお婆アさんの様に自分の目と馬の目を互ひ違ひに撫で、行くのを見ました。斯様な馬や、よくお寺にあるお賓頭盧の様なもの、實に微菌の大媒介をなす者である。さても迷信と云ふものは、恐い者ではありませんか、其六、我日本では便所から出た時には屹度その手を洗ふが、其水は往々水垢が溜つて青々して居つたり子子が發生して居りますから、知らず識

十
らずの中に恐しきバクテリアを脊負ひ込むのである（西洋では食卓に就く度屹度手を洗ふ）以上は唯だ皆さんの警戒の爲に云つたのですが、諸君は三等に居らるゝから水は充分に使用されますまいけれども、上陸の前日には是非支那人にお錢を與へても湯を貰ひ、全身を拭ふ必要がある、余も此前渡米の際、同船した或人は、無病であるにも拘はらず、病人と見做され、歸國を命せられましたが、其理由は日本人故義理と揮はかかされぬと云ふ處から、國を出る時締めたのを其儘に締めて居たが、検査を受くる時、非常な臭氣を發したので、ツイあの様なことになつたのです……（此度は上陸の際に、三等客に

限り、支那人が来て『皆さん〇〇〇拜見』と呼び廻はるのである、すると傳道師さんは、非常に憤慨して断じて左様なことはさせぬと頑張り、或は『親にも見せたことないものを、支那人や異人に見せてたまるものか』と憤る人もあつたが、中には『そんなに見たければ拜見さしてやらう』と、意張つて居る人もあつた、兎に角百四十名全體が遂々検査された時には、可笑しくもあり、氣の毒にもあり、また馬鹿々しくもあつた、戦時上村中將が軍艦の甲板で兵卒の夫れを検査されたことなどを聯想して、覺へず微笑したことである。排日の一大好口實として、日本人は眼が悪いと云ふて矢筈しく云ふのみなら

す、また日本人は淫猥の國民だと思ふ所から、遂に斯様な所置を爲すに至つたのを見て、余は大に慨嘆せざるを得なかつた)

さて余は語を更めて「監督ハリスが嘗つて云ふた事に「余は四分の一世紀以上日本人の爲めに働いた、夫は大部分桑港であつたが、多くの愛する日本の同胞が、桑港を通つて東部に勉強に行く者が、五六年して歸國する折、禮を云ふて行く様な人は大抵基督教信者か、さもなければ斯教の大感化を受けた人々である」とのことである云云」と、縷々一時間半に亘る話をした。

處が話が済んでも人々は散じないので、余は大日本帝國と、北米合衆國と、エンブレス、オブ、インデヤ號並に日本

本人の萬歳を唱へた、衆は勿論之に和したので、太平洋上時ならぬ歡聲を發つたのは中々壯快であつた。それでも人々が去らないので、余は「諸君が夫れ程望まらば、明朝十時を期して、諸君の精神修養及び心靈の爲めに、基督教の聖書の講義を致しませう、如何ですか」と聞きますと、皆喜んで歡迎して呉れました、余は此夜室に歸つて大勝利を得たことを神に感謝し、安き眠りに就きました。(此日は同日が二日ある日で、渡米の時には一日儲けるが、歸朝の時は一日だけ損をする譯になつて居ます)

約翰三ノ十六

五月三日、寒氣甚だしく昨夜は雪が降つた位である。此日から日々二回即ち朝の十時と夜の七時に集りをすることにした。其第一の集會には兼ねて準備をして往つた約翰傳五十部を分配して、其三章十六節から講義を始めました。「夫れ神は」の講釋が中々面白い、斯くて諸君の頭が一つなるが如く、船には船長は一人です、夫から我國は永久に天皇陛下が世々代々御一人である、一人の夫は一人の婦の爲め、一人の婦は一人の夫の爲めであるこれより外は不倫である、故に日本の八百萬神は全く眞

の神と云ふべきものでないのである、神は獨一無二である、と論破した、日本の土地を離れた日本人に話をする時は、實に一種云ふべからざる妙味がある。愈嶋國を離れ今大陸に向ひつゝあるのだから、世界的になり來たつて居るのと、一方には、今頼るものは唯だ蒼穹と青海原と又其中に鯨波を蹴りつゝある、エムプレス、オブ、インデヤ號ある計りである。斯様な處での説教であるから、自然妙からざる能があつた。説教の後キリストの教を信すとして舉手した人が五十五人あつた、余の今回の集りの大々的秘訣は、多くの歌を教へないで、絶對的に一つの歌を幾度となく否な幾十度となく繰返したとである。而

も一節丈外何も教へなかつた。歌の能のあることは何時もながらであるが、此時は更に深く感じた。

其夜は「神の愛」に就て説教しましたが、人々は大に感じた様に見受けたので、今度は擧手より一步を進めて握手をした。其時階子段の入口から水夫が見物して居ました。依て

Your mother's religion is good enough for you ; but our mother's

religion is not good enough for us.

と大喝して後、三等室から甲板の方を仰向て四十餘分間英語で説教をやつてのけた。西洋人は正直なもので、其次の朝から通り交はしても、屹度「グード、モーニング、サ

」と云ふ様な譯で、萬事日本人に對して親切になつた Rev. (ンダ)の能又大なりと云ふべしです。

其翌日は、同く約翰傳三章中の「甦生」に就て話をし、夜は人力車夫の悔改談をして、禁酒禁煙を促したら、八人の應諾者があつた、どうしても成功を期して進む者の決心は強いものであると感じた次第である。

船中の第一聖日

翌六日は聖日であるから、余は出来る丈立派に服を着け、塵りを拂つて併し香水は使はなかつた、香水は結婚した時、一生一度用ゐた外使つた事はない、またも三

等室に入り、安息日に就て話した「諸君若しキリストを信じ、且つ禁酒禁煙するにあらば、更に進んで諸君の胸や腰にぶら下つて居るお守護様を此方へ渡し給へ」と迫つた。すると正直な一人は「サア、上げます」とハイカラの間から引出して、潔く手渡した物がある、何かと思ふて見ると、夫は成田不動のお札であつた。今一人は何だか煮へ切らずに居たが、やがて云ふには「是は私の叔母が、私が遠い亞米利加へ行くに聞て、三日かゝつて態々受けて来て呉れた伊勢の太神宮様のお札ですから、假令基督教信者になつたと云ふても、容易に他人手に渡されませぬ」と云ひました。そこで余は「夫れならば君

にお尋ねしますが、今君が御家内を娶つたと假定して、或日細君の筆筒の上に、他の男の寫真を見出して詰問した時に、御家内が「夫れは私の叔母が三日かゝつて漸く得た何某の寫真だから、容易に御渡しすることが出来ない夫れ故私は筆筒の底に仕舞つて置きたいと云ふたならば君はどう感じますか」と申すと「成程、夫れではハツキりと眞心籠めてやるのですな」と云ひながら、其お札を渡しました。外の一人の如きは「私は昨日勿體ないと思ふて八幡様のお札を白紙三枚で包んで船の丸窓から海の中へ納めた」と申しました。十三年許前に渡米する時は百人中御守護を携へて居ない人は、僅に三人であつたが

今は殆ど其反對であるのを見て心私かに喜んだ。併し夫れと同時に日本の青年の宗教心が薄らいだ爲ではないかと思ふた時には、一種の感が起らないでもなかつた。

其夕の集會には『砂上に建てられたる家と巖の上に建てられたる家』の話をして益々是等の人々の信念を堅めた。余此夕の集會を開かふとする時に、階子段の下に立ちながら例の「まことの爲め、十字架の軍旗を」の歌をうたい出すと、多くの人々は、或は眼をこすりながら、或は寐衣の儘、或は洋服、或は和洋折衷で出掛けて來るのが例でした。

生命ある祈禱

翌朝は稀な好天氣であつたので、極めて心地よく、隨て一段の元氣を増し、いつもの様に集會を開き「祈禱とは何ぞや及び其必要」を説いて後、乳兒が母の胎より生れ出ると同時に、高き産ぶ聲を揚げますが、此聲は眞の乳を需むる爲めなのです、恰ご其様に諸君は今潔き靈に導かれて神の家族の中に生れた乳兒で、聲高く泣く人、即ち祈り需むる、健全なるキリスト者となる特徴であるといふて、直に祈禱會を開いた、處が五六十人、恰ご鱗の様に相接し、相擁して居ました（船が動揺するので）

斯く二三人祈り始めますと、代々三十三人が祈を捧げた其單純にして真心の籠つた祈禱には、余は實に涙を流して感謝した次第であつた。余は信徒となつて以來茲に十六年、斯様な生命ある眞面目な祈禱會に出席した事はありませぬ。

送別會の異觀

俗説愈明日は上陸といふことになつたので、其夜は送別會を開いた、席上余は『贖罪の眞意義』と題して三十分間説教した後、懇親會に移りましたが、蜜柑、ビスケット、鐵砲水など、あらん限の御馳走をなし、誰彼れの

差別なく大きい飯茶碗で支那茶を飲み、御互の健康を祝したのは、實に奇々妙々な送別會であつたが、余は未長く忘るゝことが出来ない愉快を感じました。

昨日迄寢食を共にした土屋君が病院の窓から『木村さん
お頼み申します』と云はれた時は、覺へず涙が出ました。
此夜は鑷木牧師の牧さるゝ加奈太メソヂスト教會の集
りに出席したが、同航者七十一名も共に参聴し、中三十
五名が一々證しをしたが、『私は長野縣某郡某村の何某で
ありますが、此度エンプレス、オブ、インデヤ號で渡米致し
まして、船中先生方のお話に感じ、暗黒中に光明を見出
し、イエス、キリストを信じて救はれた一人であります。
どうぞ宜しく御願ひ申します』と感話した者もあつた。其
後で献金した所が拾二圓餘集つた、依て之を其教會に寄
附することゝしたが、教會では紀念として聖書を購求す

ることであつた。船長の申には「エムプレス、オブ、インヂヤ號は、十七年前に出來た船であるが、悔改者の出來たのは、此度の航海が始めてゐる」と。此折鐮木牧師及び田村商店の岡田君に非常に御世話になつた、特に御禮を申て置く。

恩寵の下

翌九日は米國移民局の調べがあつたが、ヴァンダイク氏が通辨でありましたから、余は「私は日本の基督教傳道者でありますから、移民例を其儘適用するゝは甚迷惑する」と申しますと、同氏は「是は國の法律だから詮方ない」と答へました。そこで余は「私は法律の下でなく恩寵の下にある者です」と聖語を引いて、互に高笑したことであつた。此の日は遂に土屋君に面會することが出來なかつたから、一通の同情込めたる長文の書簡を送り夜はヴァンダイク氏から手厚い待遇を受けた。

シャトルの鬱林

十日、數名の友人に送られ、ヴァンクーパーを辭してシャトルに赴き、浸禮、メソヂスト兩教會を訪問し、斯くて古屋商店に服部綾雄君に會し、次で胎中君（氏は自由改進兩黨政争の當時、島田三郎氏を要撃せることあり

と云ふ一家に一泊した、氏は六七年前の舊知であつて
 久しぶりで閑談し、少からざる快を得た。

さて此シャトルに来て驚歎したのは附近の山林が實に
 立派に繁茂して居ることです。當地では我國の様に林中
 に逍遙することなどは不可能である、何となれば樹木餘
 りに密生して居るからです。殊にオレゴン州の如きは全
 世界の家屋を再度建てることが出来た丈の木材に富んで
 居ること。鳥渡樹木の大きな一例を申しませうか、
 我國では杉の木皮でも厚さが一寸もあると、先づ大木
 としてありますが、此邊では一尺或は二尺に近いものは
 珍らしくありません、余試に木の穴に腕を入れて見たが

遂に奥まで達しなかつた位です。余は物數寄ですから尺
 取出の様に手を擴げて、此木を抱へて見たが、十六遍で
 よふやく一廻りしました。また二頭立の馬車で木の根方
 のトンネルを通り得るものがあるから、之を試みて一驚
 を喫した。實に大陸の大木は流石に大きいものです。其
 時恰ど此邊に山火事があつて、巨人の如き大木が炎々た
 る火焰を揚げて燃えつゝあるのを見ましたが、實に凄ま
 じくもあり、亦た壯觀でもあつた。もう一つ大きい事は
 山の樹木を板にする事業です、先づ木を伐りて筏となし
 流れに托して或る場所へ往く、すると其處に鎖の紐が下
 つて居て此大木を縛るや否や、白煙を擧げて居る機械の

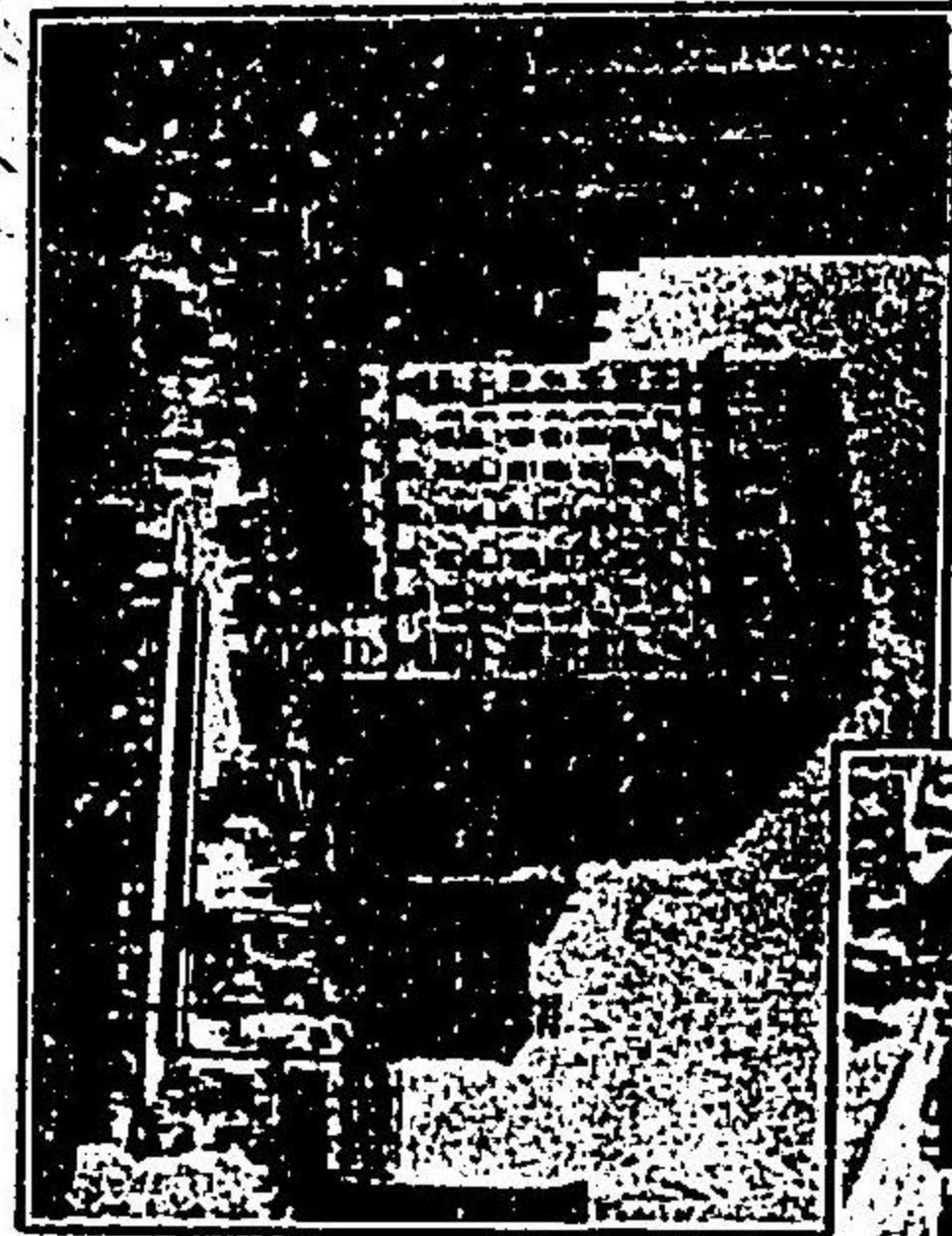
三十
下に搬ばれる、すると其運轉につれて巻き上げられ、纏
がて輕便鐵道に積み込まれて木挽場に行く、其處には
大鋸が十五六枚の齒を揃へて如何なる者も挽き割り去ら
んづ勢ひで、ブン／＼鳴つて居ますが、大木がそこへ引
き込れると、僅々十分間も経ちますと、立派な板になつ
て市場に送り出さるゝ、其仕掛けの大なることと、運轉
の巧妙なものには、流石の大日本人も、殆ど呑み込まるゝ
許りであつた。

白人悔改の初穂

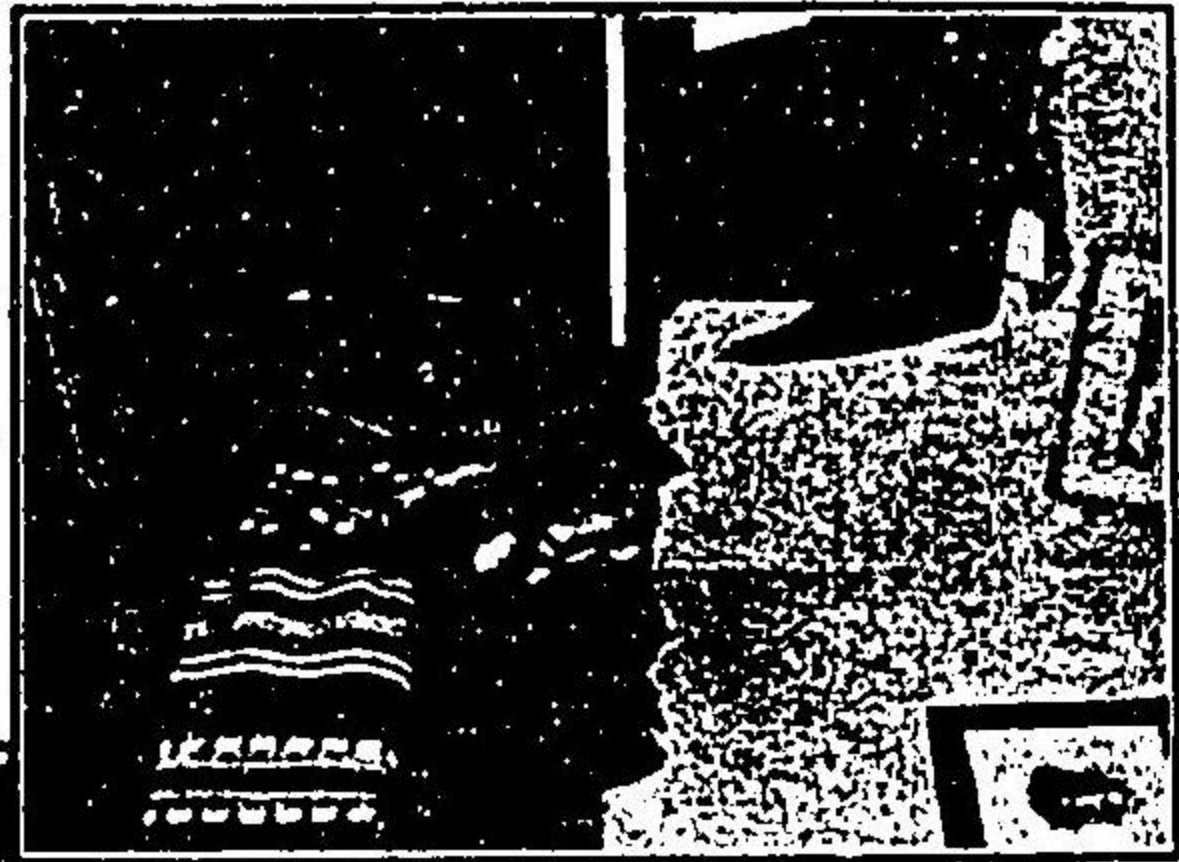
十二日シャトルを發して東に向ふたが、親切なる胎中

君は巨大なる林檎と密柑を十二ダースづゝ及び三四日分
のサンドウヰッチ、パイ及びドーナツ等を贈りくれた
さて米國鐵道の寢臺車には二様ある、一はブルマン(上
等)で、次はトワレスト(中等)です、余はトワレストの方に
乗込んだのですが、二日間程といふものは給仕の黒人と
黄色の日本人二人のみであつて、恰も我輩が特別借切り
の心地であつた。瀛車は日本の夫れの如く動揺しません
故、手紙を認むることが出来ました。纏て一人の客が入
つて來ましたが、見るとC.E.のピンを挿して居ますから
其人は基督教共勵會の會員であると云ふことが判つたので
共に大に語り合つゝ行きました。「旅は道づれ世は情」

で、種々愉快に感じました斯人は銀行の頭取でしたが、幼少よりの實歴を話されたので、大分面白かつた。翌日は以賽亞書五十三章を大聲に朗讀しましたが、聴て居る者としては唯だ二人ぎりです。讀み行く中に非常に靈感があつたので黙することが出来なくなり、車中の黒人のボーイは浸禮教會員、銀行頭取はクリスチャン教會員なれば、再度悔改せしむる譯には行かず、因つて次の車臺に出掛けて個人傳道を始めましたが、其中の一人は遂に悔改しました、これ實に余にとつては白人悔改の初穂であつた。此人は感謝の意を表せんとして、食堂車で立派な御馳走をして呉れました。



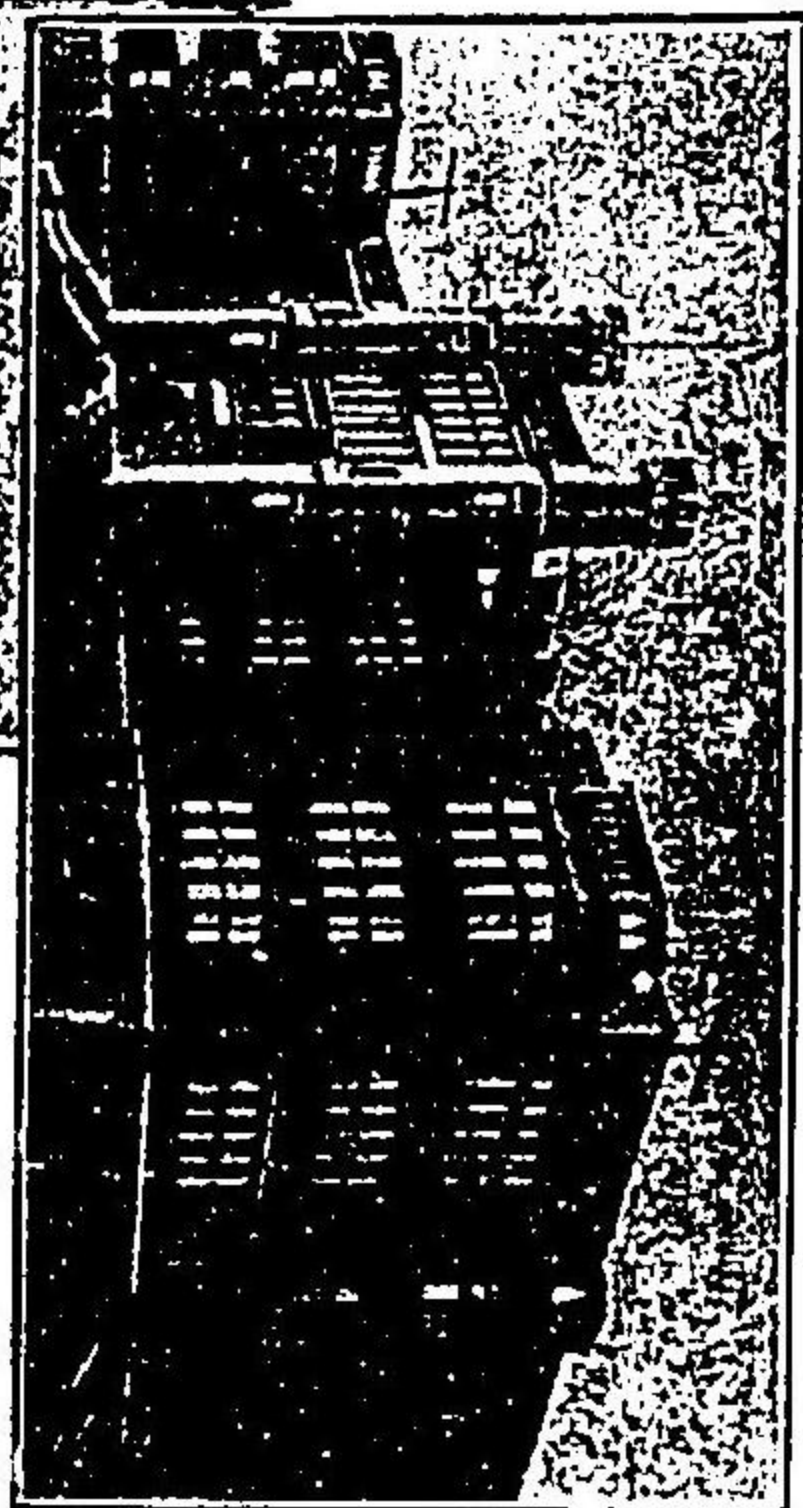
世界に名高きセントルイス停車場



セントルイス停車場



マクソン姉妹千駄谷の我家にて喫茶の圖(木村撮影)



セントルイス中學校

感慨多きセントルイス

十五日、汽車キャンザスシチーに着いたので、故ムーデー先生の最後の戦場であつたコンヴェンションホールを見舞ふたが、當時外國傳道の集會がありました。余は日本の部へ往つて見ると、観音、稻荷、枕、草履と皿が四五枚あつたので、何となく厭な氣持がした。

翌日はヘルピングハンドミッション（貧民傳道所）を見舞ひました。茲は以前東行した時、余が説教して五人の白人の靈を神に献げた處です。夫からセントルイスに向ひ車中で一口傳道を致しました。處が種々雑多の人が

握手に参りますので、俄然汽車中の名物男となり、應接に暇ありませんでした。其夕方目的地セントルイスに着した。此處のステーションは殆ど世界第一であつて、構内に宿屋、理髪店、小間物屋等荷も旅行に必要なものは皆備はつて居る。この地は余が聖靈の賜を受けた土地で五年前歸朝する時には、こゝから發足したのです。其處で舊友に迎へられ、直にドクトル、マクレーン氏の家に入りました。

其翌十七日に、ニユウエル先生に會ひました。先生はムーデー學校の聖書教授であつて、其學殖の深遠なものと傳道に活氣があることで、名高い人です。先生は

セントルイス 一千五百人

シカゴ 二千人

デトロイト 一千五百人

トランド 二千人

と云ふ多數の聖書研究者を有して居らるゝ人であつて、昨今は此四ヶ所を毎週巡回する爲め、非常に疲勞されたさうで、此日は恰ど休息して居らるゝ處であつた。

女子大學に於ける説教

此夜は女子大學の、バスケットボールに招待されて其審判者となり、翌朝は説教をなしたが、三名の悔改者が

あつた。正午はシチーミッションで説教をなして更に二名の悔改者を興へられ、午後四時からエキステンションの祈會の司會をなしたが、來會者は百餘名でした。

十九日、ニユウエル先生の集りに出席して加拉太書第五、二十二節の靈の結ぶ實は九つであるが、其實は原語では單數で記してあるとこのことを聞き、少からぬ感に打たれ、此夕は支那人の長老ミッションで晚餐の御馳走になりました。

翌朝は教會に出席し、日曜學校生徒に對して所感を述べ、説教を聽き午後は女子青年會で説教をなし、一人の

悔改者を得た。

廿一日の早朝再び女子大學の招きに応じて説教をなしたが、三人のヤングレデーの悔改者がありました。次で正午にまた女子青年會で、食事中短き感話をした。此會はオプスガールの爲め安價なる晝飯を供し、且つ惡感化を防ぎて靈化せしめんが爲に設けられたもので、別に洗面所、休息所、圖書室等も備へられ、日々三百名以上の青年女子が出入することです。余は其一室で十五分間許りの勸話をなしたが、悔改者が二人ありました。廿二日、三度女子大學に招かれて説教をしたが、獨逸人で無神論者なるヤングレデーが、潔く決心し主に従ふ

に至つたのは、余の深く神に謝する所である。集り後三十名の有志者に兵士の病院傳道に就て所感を述べ、夜は米國流のミッションの働き振を見た。

愛の一字

廿五日、市街を散歩して後、Y. W. C. A. 即ち女子青年會のレストラントに晝食を喫し、二十分間感話をしたが、聴衆は三十名許りでした。午後は某氏の宅で外國傳道に就て四十餘名に話をなした後、自動車乘に招待され、疾風の如き勢を以て舊セントルイス博覽會場を見物しました。

廿六日もオートライド (自動車乘) をなし、主客日米兩國の歌をうたふて楽しみました。

廿七日 (日曜日) 朝、コンプトンヒルチャペルなる長老教會に説教し、次でグリッグ博士の説教「イエス過ぎ往けり」を聴き、夕は支那人長老ミッションで「神は愛なり」と題し、黒板を用ゐて説教し愛の字は受と云ふ文字と心と云ふ字を組合はして居るが、これは吾は神の心を受け神は我が心を受くる義でつまり心のやり取であつて、貴國で出来た文字其儘が神の愛を表はして居るではありませんかと云ふに至りますと、或は感極まつて拍手する者、膝を叩いて如何もと悟つた者もあつて、十七八

名の中から、三名の悔改者を得ました。是れ余が支那人傳道に於ける成功の第二回目である（第一回は先年滿洲の或る學校で二名の悔改者を得た）晚餐後に再び談話し、後獨逸人の教會に出席し、愉快なる集りを持ちました。

ハートとポケット

翌廿九日は、ブレマズブラザートの招きに応じ、キヤンサスセラーに馳せ、貳百人計りの集りに於て傳道説教をなし、將に終りを告げんとして、

Friends, I want you to give your hearts to God and hands to me.

と申しましたら、之に應ずる者もありました。其翌日天

幕製造所を見物した、是は余の招かれた人の所有である此朝も昨夜同様の集を持ちましたが、來會者二百五十餘名で、説教が濟むと、或は五弗、十弗、或は五十弗を贈られました。之は右の手に善き事を行ひて左の手に知らせぬといふ教に基き、握手した時に、窃に渡されたのです。扱米國人の特色はハートとポケットの關係が密着して居るとです。ハートが開けばポケットが直ぐ開くのである。申ては失禮かは知れませんが、日本人は概して感じて、感じない様な風を装ふ習慣があります。例へば泣いても涙は見せぬと云ふ有様ですから、キリストの教を聴ても容易に信するといふことを云はない、信仰を

告白すると云ふことを、何だか敵軍にでも降参する様に心地得て、ハートを閉ぢるので困ります。「口と財布は閉ぢるに利あり」主義ですから、教會の會計は常に苦心をなし、教會の自給獨立問題の爲に、相變らずキウくして居るのです。

女學校卒業式

卅一日、種々の感じを抱いてセントルイスに歸つた。此夜ホスマホール高等女學校の卒業式で、余の知人の娘も卒業するとのことで、其招きを受けましたが、場所は基督教會堂であつた。米國では折々學校の卒業式を教會

堂でする風があります。さて此日の卒業生は三十五六名で、夫等の席は一切白布を以て蔽ひ、卒業生及び在學生徒百五十餘名は、悉く純白雪の如き衣服と靴を着け、各々紅色の薔薇一枝づゝを手にし、進行曲に合はして場に入り來つた時は、實に麗はしく、また嚴肅の思をした。次で四部合唱だの、獨唱だの、羅旬語の演説だの、實に妙を極めたもので、余は覺へず「我が日本の女學生の及ばざること尙ほ遠し」と獨語したことである。

縞の財布に五十兩

六月一日、田舎の豪家に招かれたが、其家屋や庭園の

美しくしいことは、云ふに及ばず、ピアノ、オルガン、蓄音器、電話、電扇、電気洗濯所、電気ミシン、湯沸釜、自動車、自転車、馬車等ありとあらゆる物が完備した豪家である。余は此家の賓客となつた譯ですが、我が千駄ヶ谷の茅屋に比ぶると、月籠雪壤の差あるを感じた。此家に二三日滞在して歸る時に、主人は厚く禮を述べ、且つ「貴下の來られし事により、我家の子女等が靈の上に非常な益を受けたから、ドーズ之を納めてくれ」と云ふて出したものを見ると、豈圖らんやそれは五十弗でありました。昔から「稿の財布に五十兩」とか「人生僅に五十兩」など云ふて、五十の數で死に活きをしたものだが、

余も何の因縁か、よく五十弗に出會つたのです。此町に心配性の婦人が居た、孰れの國を問はず、婦人は男子よりも心配事が多いものと見へて、兎角取越苦勞をするものです。此の婦人はまた格別で、若し自分の家で心配事がないと、隣り近處まで出掛けて心配事を探しそれがないとまた心配する事のない事を心配して歩くこと云ふ質で、神経極めて過敏、顔色は蒼ざめて居ました。反之余は過度の樂天家であつて、一切を神に托せて居ますから、何も心配がない、依て余は其の婦人に對し、「余はDon't worry clubの會員ですが、今日はあなたにも是非入會して頂きたいものです」と、真綿で首を締める様なこと

ノース・フィールドの學校



ムーデー氏



1899

The Autobiography of DWIGHT L. MOODY

SOME day you will read in the papers that D. L. Moody, of East Northfield, is dead. Don't you believe a word of it! At that moment I shall be more alive than I am now. I shall have gone up higher, that is all; out of this old clay tenement into a house that is immortal—a body that death cannot touch; that sin cannot taint; a body fashioned like unto His glorious body.

I was born of the flesh in 1837. I was born of the Spirit in 1856. That which is born of the flesh may die. That which is born of the Spirit will live forever.

シカゴの懷舊

を申して種々物語りましたが、遂に大に悟り、次第に快活の人となつた。つい數日前も禮状を送られた様な次第です。

三日（日曜）ニユウエル先生と共に田舎の教會に行きて説教しました。午後はY.M.C.A.即ち青年會に招かれて二回講演をなし、夕方また支那人の爲に更に二回講演して後、大に馳走になりました。

四日はシカゴに赴き、其地の一豪家に招かれましたが、此主人は先年余に奨學金を與へて呉れた人なのです。敢

ふれば八年以前余初めてムーデーの學校に入學した折に
博士トローレー氏が、ムーデー教會に於て、イエスキリス
トは世界の救主であるといふ説教をして居られましたたが
聴衆は二千人もありましたらう、其節先生は赤誠のあま
り涙下ると云はんより、寧ろ涙飛ぶといふ有様で、恰も
狂へる獅子と云ふべき態度で「イエスは世界の救主なり
と断定されて居つた。やがて第二の集會（即ちムーデー
流）となりましたが、之は集へる者五百餘名であつて、
一つ二つ歌をうたふた後「誰でもキリストは世界の救主
であることの証しが出来来る人は、遠慮なく話せ」との事
でありました。其語の未だ終らざるうちにエヘンと一つ

咳拂ひして立ち上つたが、背の低いのが氣になつてなら
ないから、椅子の上立ち登りて「私は支那人でない、
日本人である」と活潑に話出したのが、此木村であつた
處が五百人即ち一千の視線は、一度に余に集つて來たの
で、余は「私の髪の毛はウエリントンコール（最上の石
炭）の如く黒く光り、兩の眼は亞米利加の鷲の様に黒く
輝いて居りますけれども、私のハートはイエス、キリスト
の血しほを以て洗はれましたから、雪よりも白いのです」
と云ふて、「イエス、キリストの血凡べての罪より吾等を潔
む」と云ふ聖句を引き極く簡單に証言したので、する
とこれが導火線となりまして、「余は獨逸人でキリストに

救はれた」「余は佛蘭西人なり」「余は和蘭人なり」「吾は布
哇人なり」「余は英國人と伊太利の混血兒なり」など、凡
そ二三十ヶ國の人々が、異口同音にキリストが世界の救
主であることの證を立てられたのです。斯くて四五十名
の人々が涙を以て悔改めたハレルヤ。之を見た一豪商夫
妻は直に三百弗の金をムーデー學校に送り、日本人木村
の爲にとて寄附されました。其翌日學校の書記が、余を
呼び出して「君は何時入學したか」と尋ねましたから、
「五日前」と答へた。すると「昨夜教會で何を話したか」
と再び問ひ返したから「別に之と云ふ話もしませんが、
唯だ一言だけの Testimony をしました」と答へた。すると

書記は「茲に君の爲に奨學金三百弗送られたのがある」と云ひますから「誰が贈つて呉れましたか」と尋ねたら「君は其名を知るに及ばず、神様から贈られたのだ」と申しました。そこで余は「ア、兼ねて神様に御頼み申して置いた金が今参りましたなハレルヤ、感謝すべし」と云ふて其部屋を去りましたが、その人の誰であるかは、卒業迄知りませんでした。其人が此日余をシカゴの自宅へ招いたので、此日種々の余の働いて居ることに就て尋ねられましたから、有の儘に答へましたが、氏は「君に六百圓、説教所の新築費へ千圓御約束するから、何卒主の爲めに用ゐて呉れ給へ」と頼まれました。之を聞いた

余は胸ふさがつて俄かに答も出来ない位でした。當家に八歳になるユルマンと云ふ子供が居て、ユージンと云ふ友人と共に遊んで居ましたが、傳道の話をお聞きまして、自分達が七月四日の米國獨立祭に花火を求むる金の中から「日本の未信者の子供に分けてくれ」と云つてユルマンは二十五仙、ユージンは十二仙を贈りました。而して其夜は當家の女中四人も五十仙づゝ日本傳道の爲に寄附して呉れました。是等の金は横濱なる米國聖書會社に送つて、新約聖書を求むることになつて居ります。斯様な風に日々多忙であつたものですから、散髪する暇もありませんでした。之を見兼ねた當家の夫人は、余を自働車に

乗せ、理髮床に連れて行つてくれました、自働車で散髪したと云ふことは、余に取つて一生涯の奇談です。

八日の午後シカゴのY、W、C、A、の母の會に説教した後、ムーデー學校及び教會を見舞ひしましたが、同教會の日曜學校は實に大なるもので、生徒が二千人、教師が百五十人です、此夜再び汽車でセントルイスに歸りました。

日本好の婦人

九日、ドクトル、マックレーン姉方に赴く、同姉はセントルイスに於ける第一流の女醫で、日本人の爲めに多

大の同情をもつて居られるので、萬國博覽會開會中も、非常の好意を以て我が同胞の爲に盡されました、彼の跡見花蹊女史や、手島高等工業學校長なども、當時招かれたと云ふことです。同姉先年令妹と共に日本を漫遊された時、千駄ヶ谷の余のホームにも一泊されましたが、其折家内の嫁入着物を着、令妹は黒の紋付でお茶を喫んで居る様を撮影しましたが、寫眞師は斯く申す木村でしたから少々手間ごり、其爲め兩姉共痺がされて立てなくなり、横に轉がつたが、今回もそんなことなど語り出して大に笑ふたことであつた。當時の主人役であり寫眞技師であつた余は、今は其家の客となつたのであるが、其寫

眞は大切に保存され、一室にチャーンと飾つて居られたので、大層面白く感じました。同姉はまた如何様爲めか日本の醤油を好まれ、歸國して後も、常に「オシヨート」を厨房に絶やさないと言ふことである。同夜はエキスポジションビルディングに至り、簡短なる講演をなした聴衆は八百人ばかり。

十日（日曜日）マックレーン姉と共に郊外に至り、青野原に座して羅馬書を研究し、午後は昨夜の場處で、一千餘人に對して説教し、夜はまた支那人の長老ミツシヨンにて働き、一支那人の悔改者を得、その足にて例のビルディングに至り話した。

其翌日は二三の舊友を訪ひ、日中祈禱會に出席し「水上のペテロ」に就て話したが、悔改者二名を與へられた夜はまた支那人ミツシヨンに至り例の如く……、次の日も亦たエキスポジションビルディングで五百名の爲に話し、午後はエリ氏の宅で余の送別會を開いてくれましたが、集る者五六十名、御馳走はアイスクリームにケーキ、コーヒーでしたが、集會者の暖い好意は實に何でも云はれませんでした。其翌日は出發準備に忙はしく、多くの人に送られてセントルイスを辭したのは夜の十一時であつた。

シカゴに於ける傳道

汽車中に心身を息め十五日の朝、シカゴに着し、直にムーデーインステテュートを訪ひ、支那内地傳道會社のフロスト氏に招かれ、次で舊先生方に會ひ、大に喜ばれました。此夕舊友坂井勝次郎君に會ふた、同氏は嘗て余がカリフォルニアから當所へ伴れて來た人で、音樂を専門に研究されたのですが、近々歸朝して共に働く約束をしました。

夜はバシフヰック、ガーデン、ミツシヨン即ち連夜説教所で話をしたが、席に露國人が居りましたから、余は

之を呼び出し壇上で暖き握手をした所が、一座キリストの愛が現はれたとてハンカチーフを振り、ハレルヤ、アーメンを叫び大に喜ばれました。此夜の悔改者は九人でありましたが、その一人は嘗て共にキャンサスシテールで働いた人であつたのに驚きました。彼曰く「あなたは引續き斯くも熱心に主の爲に働かれて居るのに、私は墮落に墮落を重ねました、實に慚愧に堪へません」と。

翌る日は舊友兩三人を歴訪し、夕方ムーデー學校の馬車傳道隊に加はり、大市街の五ヶ所に短い説教をなしたが、昔日の勇氣未だ衰ざるを自覺し、深く感謝した。

十七日(日曜日) ムーデー學校の女子部に招かれ「聖

登の導き」と題し、一場の感話をした。夫れからグレイ博士の説教を聴き、午後は聖書研究會で五百人に話をなし、其夜再びバシフ井ツク、ガーデン、ミツシヨンで話をした所が、十二名悔改しました。此集りが終るや否や、同所より出發してデトロイト市に向ふた。

齒醫者の厚意

デトロイト市に至り、ニール先生の友人なる齒科醫ロイ氏を訪ひ、「ハウ、デュー、エー、デュー」の一禮終るや否や、「あなたは齒醫者ですな、私は齒が痛んで困ります、幸に……」と切り出すと、氏も亦た無造作に「こ

ちらへ」と導き、長椅子に横はらせ、無雜作に併も無料で最も機敏に治療をして呉れましたが、自分ながら聊か其突飛簡畧なのに呆れました。お蔭で未だに其の齒は痛みません。

此夜はスコット氏の長老教會に前座を勤め夜は先生と床を同ふして眠つた。

翌朝五時デトロイト市を去り、流車を二回乗換へて午後クリスライン市に着し、ズインク氏方に投じたが、其晩氏の妻君が急病に罹りましたが、余は其機會を利用して氏の次男に主の道を傳へ、大に悔改せしめました。

郊外傳道の故地

六十

其翌日午後一時、同所を發して七時半ハツフェロ市に着した。同市は内國博覽會のあつた折、其音樂堂でマツキンレー氏が諸人に握手せる時に銃殺された處である、其建物のある直ぐ先で余が嘗て郊外説教を試みた紀念の場所であります。余は着驛するや否や、デーマン氏に導かれてバプテスト教會に赴き、一場の説教をなした。さて此デーマン氏と相知るに至つた來歴は随分趣味あることでありますから、其梗概を一言しませう。余嘗て大阪から姪める妻を伴ひて上京した時に、同列

車中に朝鮮に居らるゝ宣教師ジョンズ氏と懇意になつたが、同氏は嘗て余の友人嶋貫兵太夫君が朝鮮傳道に行かれた時の知人であつたから、余の姓名丈は知つて居られたので、車中愉快に東京に着いた、其後同氏歸國の後バツプロ市のバプテスト教會を訪問した時、此デーマン氏が『百弗の金を朝鮮か日本の傳道費に送らうと思ふが、どうしたら良からう』と相談した。其處でジョンズ氏は『日本の木村氏はゼントルマンである、余は瀛車中氏が其妻を大切にいたはつたのを見受けた、彼は其傳道費を托するに適當な人である』と返答した結果、其金が余の處に送られて傳道の爲に使つた、こんなことでデーマン

氏と知己になつたのであるが、余は余が姪める妻をいたはつた爲めに傳道費を得るに至つたのは實に意想外の奇談ではありますまいか、人間萬事此の如く何處如何なる處でどういふ機會に接するかわからないものです。

ナイヤガラの大瀑布

翌日ナイヤガラ瀑布の見物に赴いた、此瀑布の大なるには、何時もながら驚かざるを得ない、余は五年前にも此處を訪ふたが、巨大の飛瀑滔々流下して盡きぬ不減不増の壯觀で再び見て神の愛も此の如く幾年経つても盡くることなく、世界人類の心の奥に注がるゝと云ふことを

實物教授された。

余は此日瀑の裏を見る爲めに、トンネルを通りて後方に出でたが、其勢のすさまじいのに、更に一驚を喫した次で瀧の前面に船出したが、太陽の反射で、巨大の虹が鼻ツ先に現はれた。其美觀其壯觀唯だ「ナイヤガラさてナイヤガラ、ナイヤガラ」と云ふより外はなかつた。

此瀧の見物に行くには桐油衣を頭から足の先まで着けるので、其有様はまるでエスキモーの姿其儘である。此時一米人が、大に瀧の美を誇り初めたから、余は云ふた「君はクリスチャンにあらざれば之を誇る權利はありません、天地を創造し給へる神はわが父である、即ち此瀑

は吾父なる神の小指のウオルクの一ツである、ドーです
 吾父のつくられし瀑の美は！』と主客轉倒でコツチから
 瀧の自慢をしてやつた。其歸途瀧の近傍（合衆國とキャ
 ナダの境）で路傍演説を始めると、百人あまりの人々が
 電車を待ちながら、聽て居つたが、其中の一人が早速
 コダックを出して私を撮影したから、余も亦た話しながら
 コダックを出して彼を撮つてやつた、人々は日本人の
 抜目のないのに驚いた。後發して午後十時半キャナダ州
 トラント市に着しグランドホテルに投宿した。

九十九の羊

翌日午前八時廿分に發車すると、車中一老婦人を見失
 つたとのとで、大騒ぎだつたから、余も氣の毒に思つて
 探してやつたが、二十分ばかりの後其の老婦人が出て來
 たので、皆大喜びであつた。ソコで私は之を題にして、
 『レディス、エンド、ジエントルマン』と大喝し、次で九十
 九は野にをき、失ひたる一疋の羊をたづねに往かれたキ
 リストの話話を話したので、澤山友人が出來た。其後で田
 舎の老婆が大きな荷物を持つてはいつて來たから、余は
 其老婆をたすけて坐をつくつてやつた、スルト老婆は禮
 を述べて後『君はクリスチャンか』と問ふから『然り』
 と答へると『ソラだらうと思つた』と云つた。

トーレー博士の活動

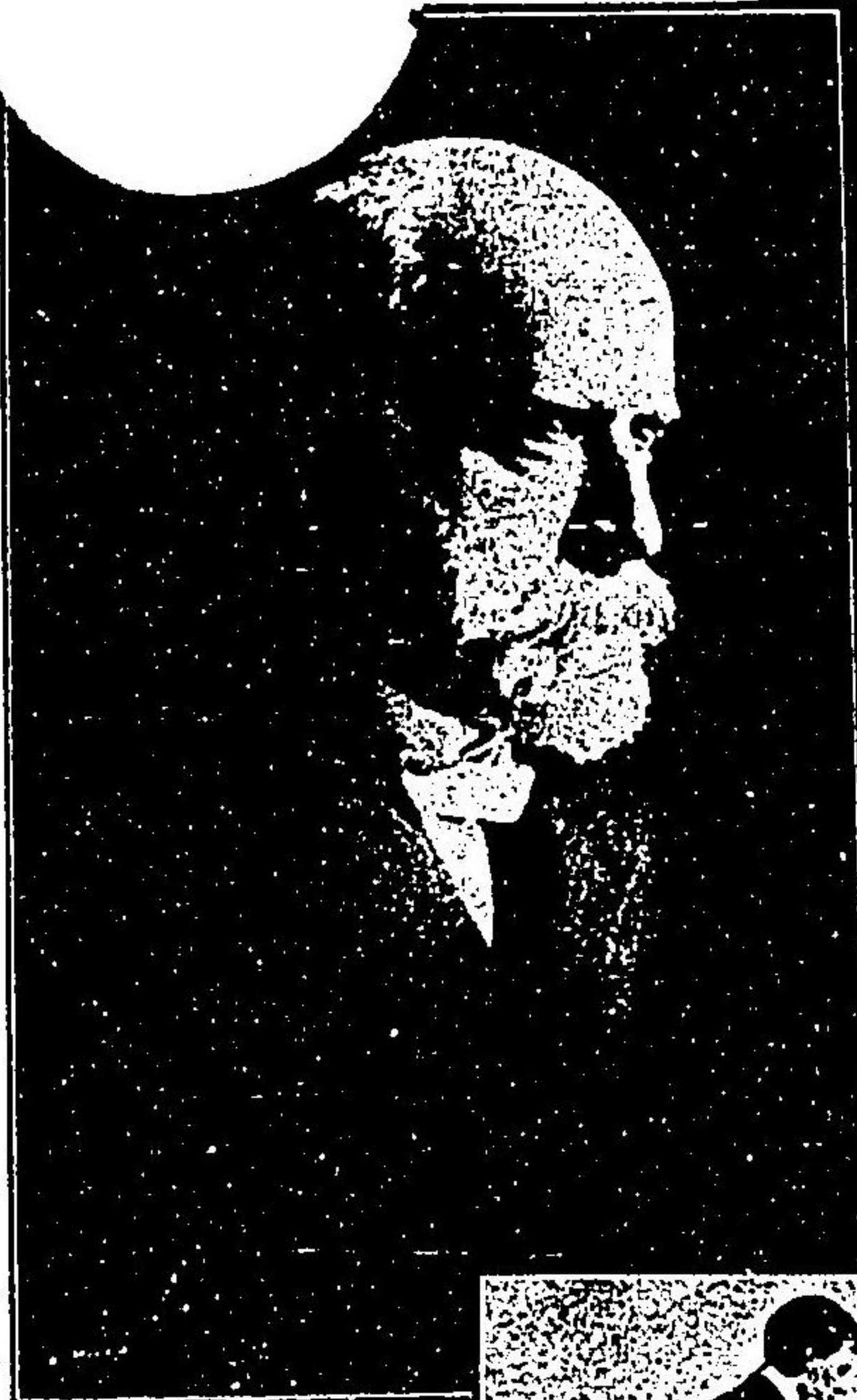
六十六

午後五時キヤナダ州の首府アトワ市に着し、此夜彼の有名なるトーレー、アレキザンダー、ミツションに出席した昔はムーデー、サンケイと云つたが、今はトーレー、アレキザンダーの世の中である、この町のデイリンクと云ふ最大の集會所を占領して、非常な勢を以て主の道を述べ傳へて居る。トーレー氏は我輩の先生であるが、併し今迄は是程にエライ先生とは實は思はなかつた、アレキザンダー氏は同窓で、たゞ數年先に卒業しただけであるから、之も實はソーエライとは思はなかつた、けれども今度來

ハッツ君



アレキザンダー君



トーレー博士



ハーグチス君

て見て、兩師の盛んな働らきに一驚を喫すると共に、又其偉大なるを知つた。

此夜余が出席した時には、既に四五千の人が来て居つた。夫れから歌を歌はせて居る人はアレキザンダーであつた。是迄歌のリーダーは、一尺五寸位の棒を持つて、ワン、ツー、スリーの的にやつたが、今はモー之は舊式とつなた、アレキザンダー氏のやり方は斬新なるもので、夫れは全身のゼシチュワー（動作）とでも云はふか、歌の力のはいる處には全力をいれ、歌のやさしい處には如何にもしてやかに、恰度早稲田のポールマンが、將さに投げんとする様なさまで導くかと思へば、一轉してこれはまた

春の小川の流れの様なやはらかなさを以て導く、實に何とも形容が出来ない、それで五千人が一人の如くに歌ふのには驚いた、ピアニストはハークネス氏とて濱州の人です、四五年前トリー、アレキサンダー兩師が同地に出陣された時に、悔改決心した一人で、同氏はセエタ（芝居）の音楽師——セエタに出る位のもは歌うたひでもピアニストでも有名な人である——で、世にもまれなるピアニストであるから、歌の譜を見なければ弾せられない様な人とは丸で違ふ、タツタ一臺のピアノで五千人をみちびくのも、大概は察せられるので、其指の働らきは殆んど電気でもかゝつて居るかと思はしめる如くに働いて

居た。

今此アレキサンダー氏と、此ハークネス氏とに導かれて、有名な年少の歌うたひが where is my wondering boy song を情を入れて、訴ふるが如く悲むが如く歌ふと五千人の聴衆はまるで「青菜に鹽」である、ソコへ博士トリー氏が或は火山の勢を以て罪を責め立て、或は慈母のやさしさを以て十字架の功德を説いたので、此夜の改悔者は五十人程あつた。

此集りの前には、役者養成時間があつて、古き信者は如何にキリストの爲めに働らき、如何に罪人を導くべきかを教へられるので、愈々集りの時には是等の働き手が

トーレー氏一命の下に、手足の如く、細かに働らくのである。

七十

トーレー氏は傳道師一名唱歌者二名ピヤニスト一人及書記と、タイプライターガールを連れて働らいて居られる、新聞社からは二三人の記者がトーレー、アレキザンダー、イミッシヨンの爲めに遣はされて來て居る。アレキザンダー、コワイヤー（和唱隊）は六百人であるが、同氏が私に語らるゝ處によれば、リパブルの和唱隊は二千五百人であつた、其聴衆はやがて二萬四五千人に達することである、ア、日本の和唱隊！ア、日本の聴衆！！翌廿三日、Y.M.C.A.で祈禱會があつたが余に感話を求められ

たれば、之をなし後ちて祈りをした。

月下の清遊

此夜はアレキザンダー和唱隊のムン、エツキスカルシヨ
ン（月夜清遊會）であつた、即ち一漁船を借切り、和唱隊
の者だけ乗り込み、七時より十一時頃迄アトワの川を上
下したが、歌ふもあれば、或は話す者もあり或は證する
もあれば、或は祈るもあつた、私も改悔談をやつたが
皆大に喜んで共に感謝して呉れた。月下清流に掉しつゝ
神を讚ふ、快や云ふべからずであつた。

轉戰の愉快

次の朝、アレキザンダー氏は教會で説教されたが、會堂は充ちあふれんばかり、全氏の話は葡萄の實の話であったが、此朝一切を主にさへげた人は七十餘人、實に大なるリバイバルであつた。

午後三時はウヰメン、オンレー即ち婦人だけの集りであつて、五千人の婦人が堂にみちた、ソコでトーレー氏は「勇士か臆病か」と云ふ題で話されたが、百五十人の改悔者があつた。此夜はメン、オンレー即ち男子だけの集りで、所謂セラズンが五千人、(五千人の外入ること能

はず)に同題で話されたが、是亦改悔者が百五十人あつた。翌朝トーレー氏は、三十五六人も集つた牧師會に臨まれたが其重なる話は、第一吾等は罪人を救はざるべからず、第二之を養はざるべからず、第三傳道師を作れ、之であつたが、氏の實驗上の話であつたから言々に力があつた、三時半にはメソヂスト教會で「聖靈」に就て話され、七時には例の大會で五千人の聴衆に向つて話されたが百人の改悔者があつた。

翌廿六日余は宿屋で、トラントから來たレデーに聖靈のパンチスマに就て話した。同姉は大に惠をうけられたが、つい五六日前にも禮狀が來た、聞く所によると彼女

の爲めに恵をうけた人が多かつたと云ふことです。

トーレー氏は此日もメンヂスト教會で話をし、夜は又例の場所で五千人に説教されたが、此夜も百人近くの改悔者があつた、其中にはアーレンと云ふキヤナダ州のボツクシング（拳闘）のチャンピオンも居つた。

二十七日朝八時四十五分ノースフィールドに向つてアトワ市を發した、發するに臨みアーレン氏と共に紀念撮影をなし、同氏其他に送られて瀛車に乗込むや、私は乗客に一場の感話をしたがアーレン氏も亦之に次いで話したので、人々は非常に深き注意をした、何となれば木村は極東の日本より來たのであるし、アーレン氏は名にし

負ふ横綱だからである。

病犬の教訓

途中モントリオ市に下車して、前橋のベッドレー氏の令兄の宅を訪ふたが、折悪く避暑に行かれたとて不在であつた、其歸途一病犬が電信柱の傍で苦んで食物を吐いて居るのを見た、いたはつてやらうと思ふたが、暫しそれを眺めて居ると、其犬はやがて歸り來り其吐き出した物を再び食して仕舞つた。ア、犬と思へば犬であるが、我々信徒の中にも此犬の様なのが澤山居るので困る、一度も二度も三度も、悔改めては祈り、祈りては再び罪を

犯し、犯してはまた元へ歸る人は、此犬と一體である、聖書に「爾曹犬をつゝしめよ」と云ふ句があるが、余は遠い國に来て此教訓を實見したのであります。

余は更に乗車して加奈太より米國に這入つた時車中で税關吏に荷を改められた、やがてノースフイルトに着しムーデーの學校に赴いた。時恰もスチューデントコンファレンス、(學生大會)が開會中で、方々の大學生が三百人許り集つて居たが、東洋人としては印度人九名、朝鮮人一名、支那人十五名、日本人は私共唯三人。

故師の紀念地

ノースフイルドは、故ムーデー氏の開かれた村ムシロ町のある處です、此處は風景絶佳、大に日本に似、連山皆蒼鬱たる青山であつて大河其傍を流れて居る。茲にムーデー氏の設立した男女の學校があつてマウントハーモン學院と云ふ、余はスチウデント、ヴァランチャ、ムーブメント(學生義勇會)の二十年紀念祭に出席したが、本尊のムーデー氏居られないのは、何となく氣拔けの感があつた、此夜電話で余を呼び出したものがある、誰かと思ふて出て聞くと、嘗て横濱で會ふた、聖公會の牧師ジャッフレ博士であつたので、翌日氏を訪ひ、種々の物語をした、此町はザウスグァンと稱し、寒中は零度以下二

十五度を降るといふ處であるから、家屋の構造も多少異り、既の如きも直に居室に續て居て、恰ど日本の田舎の便所が入口にあると同様で、米國としては鳥渡趣を異にして居る。此夜メソヂスト教會で説教したが、辨士が日本人だと云ふので聴衆が中々多かつた。

教會員の運動會

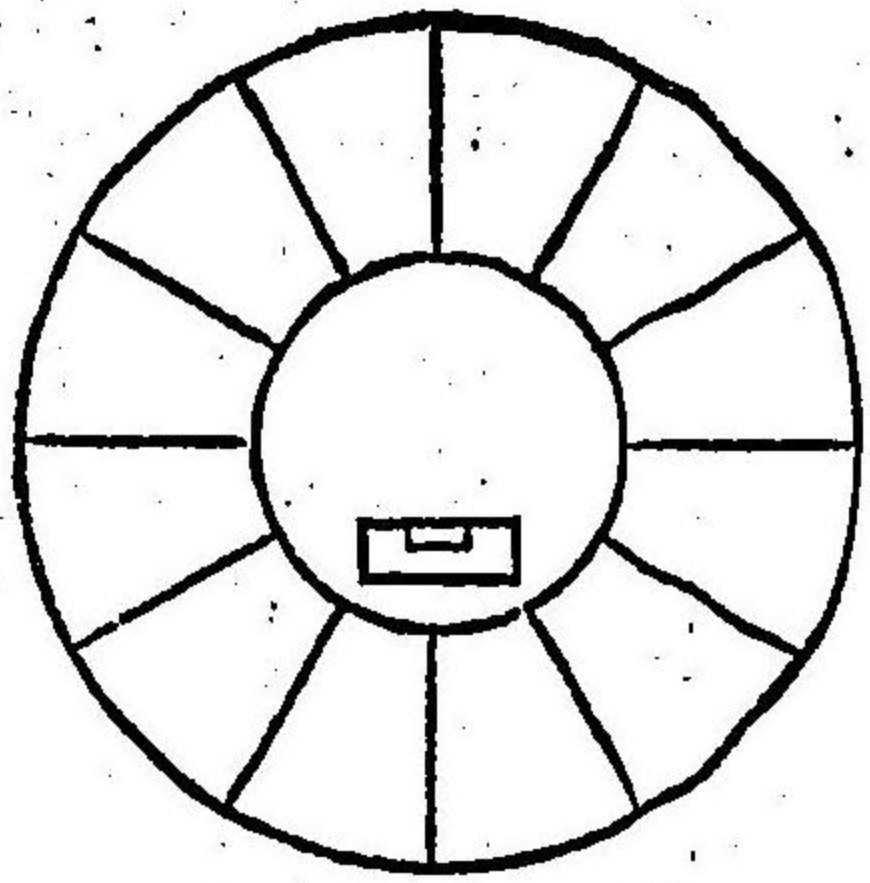
三十日はスプリングフィールドに参りました、時しもメソヂスト六教會聯合のピクニックで、郊外二里許りの處で運動會があつた、米國の運動會は實に愉快なもので、ベースボールをするにも、昨日迄はデクニテ一を保つて

居る牧師傳道者も、今日は全くの青年となり、懸命に汗を流し、バットを握りボールを打込む姿實に勇しい青年にも譲らぬ、牧師對教會役員、日曜學校教師對共勵會役員などの競技もあつたが、婦人連はウワー〜叫んで、頻りに聲援をし居る、余は之を見てこれなる哉、これなる哉と感服した。

靈的活動

七月一日、朝、メソヂスト教會の日曜學校に勸話を頼まれましたが、講堂の設備の完全なのは實に一驚を喫した。會場は二階と下と二つに分れ、室の全體は圓形にな

つて、恰ど密柑を中分した様である、そして一の幕を横にすれば辯士の顔を望むことが出来る様になつて居る、余は此日七歳より十四歳の少年を對手として話をしまし



日曜教室の図

たが、悔改めて神の福音を信ずることを決心告白したものが總て廿三名あつたので、父兄を始め教師等七八名は涙を流して喜び、且感謝して居た、抑も米國の日曜學校の美は教ゆる先生も熱心ですが、教はる生徒も中々勤勉なことで、四五歳にして出席し初め、婚禮する位迄教へ込まれるので、よく『自分の婚禮に日曜學校の元の

先生をも御招待した』など云ふことは折々聞く處です、何と美はしいことではありませんまいか。此の如く日曜學校で、神の言葉によりて教へ込まれてあるのですから、大リバイバルの時などに、一度之に刺撃せらるれば、或は倒れ或は氣絶する者がある所以である、此の午後浸禮教會の、支那人日曜學校に招かれて話したが、神は三人の悔改者を起し給ひました。或る日先生は、支那人に對し、『君はプロフェット（豫言者と利益と發音殆ど相通ず）を知て居るか』と、これ實はイザヤを指して問ふたのである、然るに彼は意外にも、『ミ、バイ、セン、グ、ス、テン、セン、エ、ンド、セル、フェ、テ、セン、プロフェット、ワイ、セン』即ち『我

れ品を十仙で求め、十五仙で賣れば利は五仙である」と、さても人は常に思ふて居ることを云ふものである。

此夜レスキエミッションに行き盲人にして有名なる讚美歌作者、クロスベ老姉に會ふて種々物語をした、其折紀念の爲め寫眞を贈られた、此教會に一人の黒人があつた、彼云ふ「余はエセオピア人であつて、キリストに救はれた者である、君は極東の日本より來られたが、畢竟アフリカ黒人と東洋の黄人とが、握手したのは愉快である」と非常に喜んで居た。暫くして彼叫んで曰く「イギリス人よ來れ、フランス人よ來れ、蘭人、米人、印度人も亦た然り」と云ふて共に相會し七八ヶ國の人々を講壇に

立たしめたので非常な盛會であつた。余は『北のはてなる氷の山』を歌ひました。此夜は舊友故ギボット氏宅に投ず、同氏は野外説教者として有名な人であつた。

翌夜同氏の未亡人の周旋に依り、四十人の人々にパーソトーク（坐談）を試みた所が、皆喜んで謹聽した。

翌三日生前のギボット氏の説教を込めた蓄音器を聞き再會した様な氣がして誠に懐しかった。

紐育市に入る

同日午前十一時十五分同地を發し、ニューヨークに着したのは午後三時十五分であつた。先づ日本人ミッション

ンに廣瀬君を訪ひ次でユニオンセミナーに萩原及矢野兩君を訪ひてこゝに一泊し。久方振りて胡瓜に鹽を附けて嚙り、やがてテーブルを俎板にして酢と鹽をかけ、岸田萩原、矢野、木村の四天王は、胡瓜もみを拵へて食つたが「ア、こゝで米のめし一杯」と云ひ始めたれど思た許りの乞食の祈念で駄目々々、遂に床に就く、時は朝の三時であつた。不幸にも私は南京虫にいじめられました。之はユニオン神學校であつたとはハ、ハ、ハ。

翌日公園及び地下鐵道を見物す、フエフス、アヅニエーの宏大なるには驚きました。プロクレン橋の大なるを見ては、とても吾妻橋や、厩橋を干を合はすも及ぶ所で見

はないと思ふた、盛なる哉！盛なる哉！！紐育!!!

翌五日クック會社に、二百二十三弗を投じて、紐育より東京まで海陸を通じての中等切符を購ふてフルトン、ミツシロンに往き、日中祈禱會に出席した。集りは正十二時より十二時半迄である、つまり多忙なビジネスマンが御飯の前一寸聖き空氣を吸はんが爲め、又神の助を得んが爲め茲に来るのである、東京では今救世軍が銀座で之を遣つて居る、此夜彼の有名なる貧民窟傳道のウォーター、フロント、ミツシロンに往く、同所には説教者なく、只初めより終りに至るまで歌と救はれし人の證を以て人々を導くのである、昨日の乞食、今日の紳士曰く「私は

昨日までは世人に捨てられたものであつたが、昨夜悔改して今此の如く喜んで居る』と、満面に笑を含んで話す人あり、或は『私は之で救はれてから丁度三年と二ヶ月六時間と二十分である』と云ふもあり、中にはまた『私は僅二週間と一日しかたゝぬベピーである』と申しました。其言葉に力のあるには余も感心したのである。茲では余の説教の必要もなく余も亦た此の衆の様にして救はれたものでありませんから、此夜は珍らしく無言で済した。救はれし人は五人許りありました。午後十一時半頃、支那町に於ける救の集に出席して一寸した話をしました。茲は所謂デヴェルス、ケッチン(悪魔の臺座)と

申さるゝ所で、實に墮落者の集合所である、毎時の集が午後十一時半頃より始り、午前一時或は二時頃終ると云ふ實に妙なミッションであります。故に爰の傳道者は晝寐て夜働きます。夜稼ぎ傳道者とは實に始めてゐる。翌六日再びフルトン、ミッションに往きて感話をなし、又米國聖書會社、長老教會、外國傳道會社及び救世軍の本營を訪問した、いづれも壯大なものである。

美しき市街

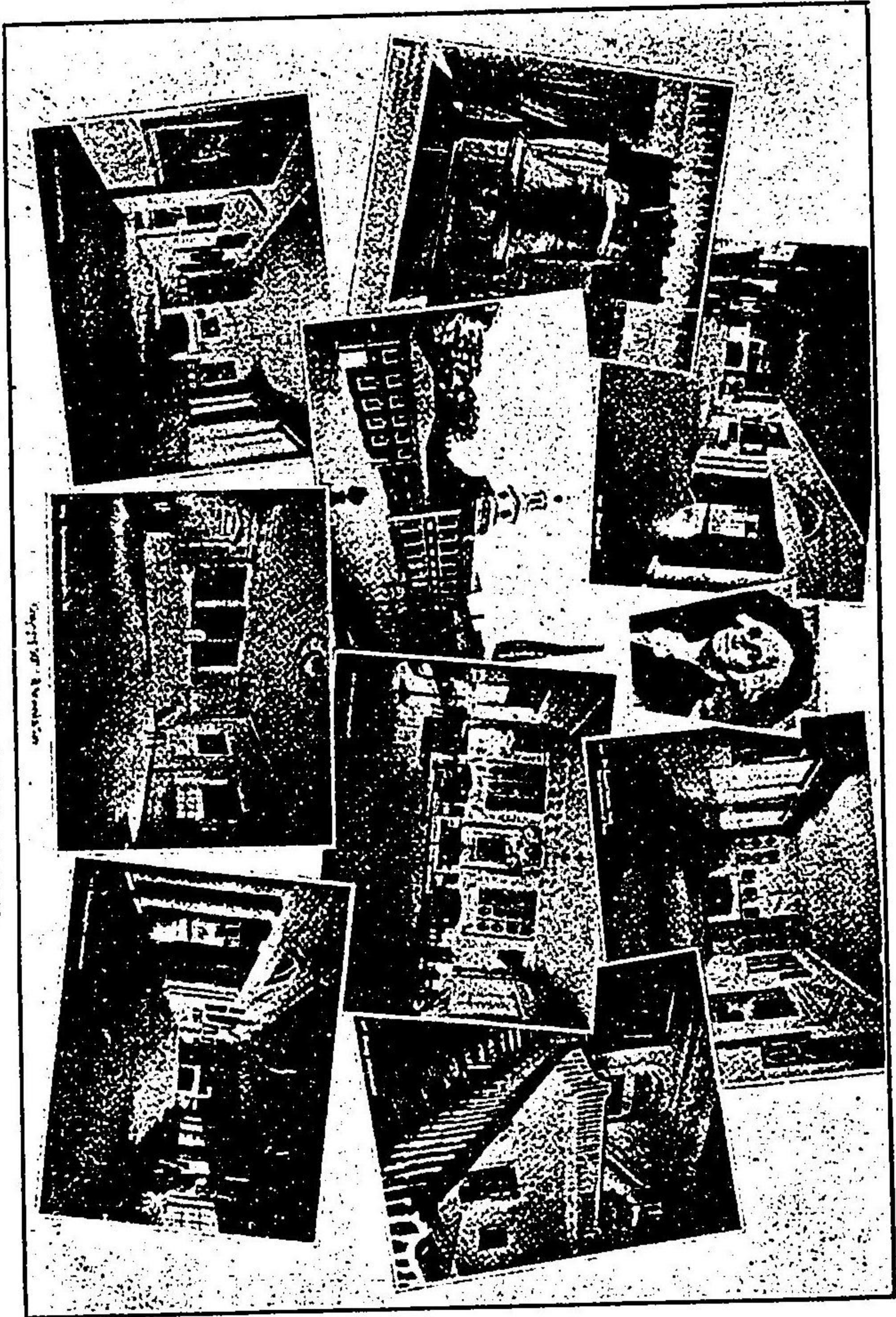
七日は萩原君と半日許大に語り午後二時出發してチャーマンタウン市に入る、同市は有名な美しき街であつて

フフィラデルフフヤに近し、當夜支那内國傳道會社の部長
フロスト氏方に投ず、氏は温厚の君子である。

翌八日アットニメント、チャーチ(贖罪教會)を訪ふ、此教會
の牧師はスターランツと云ひ、頗る福音的の士で毎週
五ヶ所位に於て二三千の人に聖書の講演を爲す人である
此教會の扁額には Jesus only (一途に主) の意味で書いて
あつた、此夜三百人許り來聴した。

獨立閣上の感慨

九日フロスト氏に導かれてフフィラデルフフヤを見物す
先づ第一に獨立閣に至るや有名なるベル、即ち獨立布告



合衆國獨立に大關係ある建物及其他

の爲め叩き破りし鐘を見、幾多の感に打たれた。階子段の所には『吾に自由を與へよ、然らざれば吾に死を與へよ』と絶叫したバトリック、ヘンリーの肖像があつたが私などは同氏に睨まれる様な心地した。なせなれば幼少の時此人を大に崇拜したとあるためです。呼米國の今日の様は墮落せりと云ねばならぬ。余は實に『獨立時代の精神何くにありや』と嘆息したとである、血に汚れた旗茲にあり、ワシントンの軍帽茲にあり、破れ太鼓彼所にあり、實に趣味ある多くのものがあつた。後ワシントン夫婦が出席された教會を尋ねました、同氏の席は今に保存してある、私は早速御免を蒙りて這入り込み、シ

ヨージ、ワシントンの腰掛けに腰を据へましたが、實にイ、氣持がしました。この時こそ大統領の椅子を占めたハハ、ハハ、ハハ。夫からフランクリンの墓を見に参り、獨立旗の生れし家を訪問し、世界の富豪家ワナメーカーの大賣店に買物し、次でカアペンター、ホールを見舞ひて歸りました。其の他は枚擧に遑あらずである。

東奔西馳

翌日手紙六七通を認め、午後二時同地を發しニューヨークに歸り、再び發して五時半バセイツク市に入る、八時よりミツシヨンに傳道す。集る人僅かに二三十名であ

つたが、一人の酒飲と一人の子供と、二人の年若き婦人が悔改めました。其夜は舊友牧師モリニ氏方に投じた。

十一日、バセイツクを發し、モリス氏の案内によりニューヨークを再び見物し、正午海中の自由像、スタチュエ、オヴ、リバーテーに至り、絶頂まで登る、此日二十三通の手紙に接した。此夜はニューヨークのキャセリンミツシヨンに説教したが、十人の男子と三人の婦女が悔改めました。翌日は新調のタイプライターで手紙十通を認め、午後は又たバセイツクミツシヨンに説教しました。翌十三日三度ニューヨークに赴き、日中祈禱會に出席し、午後船でコーネ、アイランドに往く、茲は遊覽所で

ある、パノラマで天地創造や、ミルトンの失樂園が見ものであつた。此夜はフロレンス、ナイト、ミツジョン(大久保の慈愛館と関係ある)に説教す、茲は墮落婦人救濟傳道専門の場所である。

渡英の船中

十四日、友人に送られて愈々ニューヨークを發し英國に向ふ、船はアーゲデヤ號で、萩原君に見送られた。

十五日は聖日なりしも、海嫌な僕ですから、床の中で寢て居ました、聖日寢て過したのは珍しい事であつた。

十六日、八年前シカゴで寢食を共にした、傳道者デヴ

井ドソン氏及其姉に船中で偶然邂逅した、聞けば同氏は吾輩が招かれて行くケズイック、コンヴェンションに往かる、といふことで、互に握手して喜び合ふた。

翌日は非常の大雨で困まつた、十五弗のバナマの帽子を一人前二十五仙づゝ集めて、十五弗の額に達した時、織で當てる仕組になつたのがあつて、余にも是非一口引受けよとのとで無理に勧められた、雨が降るので人は皆狭き座敷に佇立して居る時でしたから、小高き所に登り我輩はキリスト者であるから、賭博じみたとは一切遣らぬと喝破して、纒々十五分に亘る船中傳道を開始致しましたが、やがて同志の友を得、彼所此所からも握手に來

た人々が澤山あつた。世の中は鬼ばかりではない。

無線電信

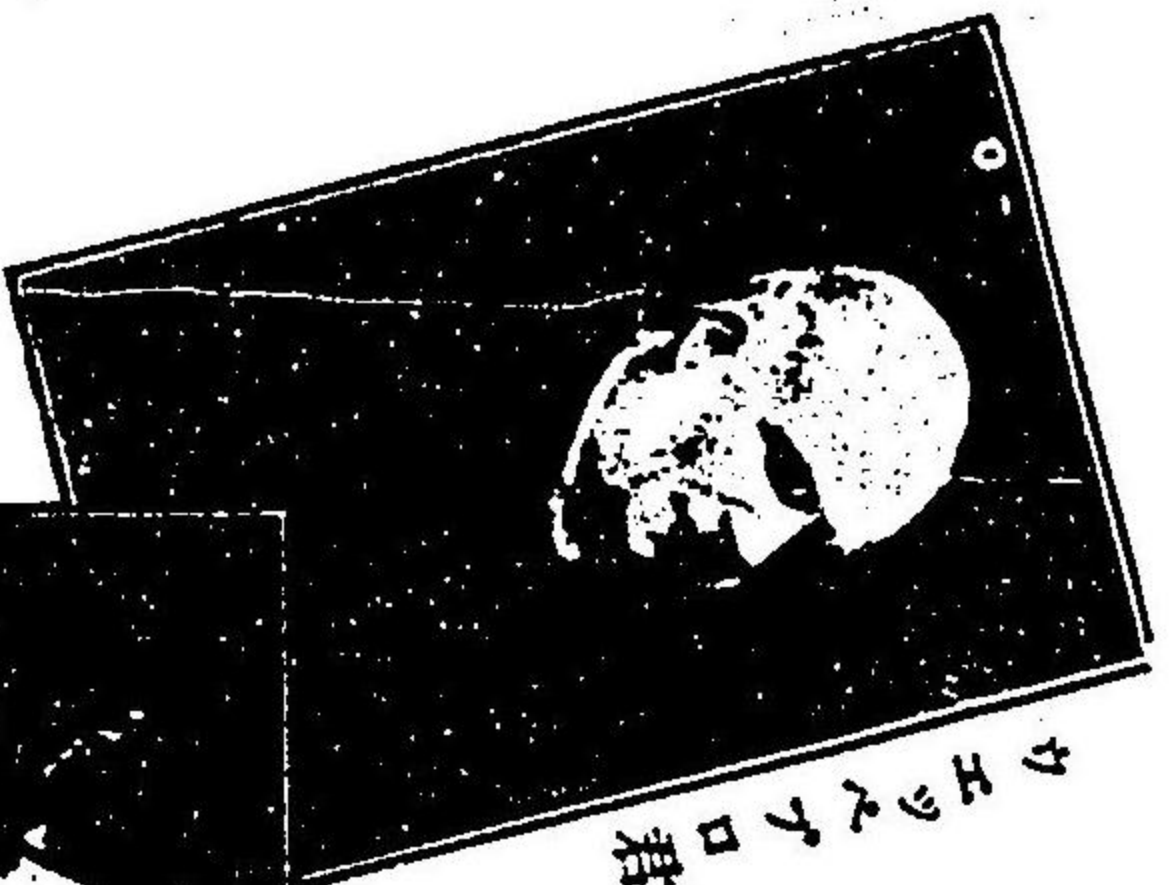
此日三十餘哩先に一船が見へたのですが、此船と我船とがしきりに無線電信で話して居るのを實見した、其聲は唯たジー〜であつた、其答である字を送つて居るのだもの。ア、無線電信！我輩等の祈が神に達するは慥かに之れ無線電信であつて、無線電信の器械に故障があれば返事の來ぬことが多くあるが、神がまた祈に答給はぬことは昔から今に無いことである、鬼に角其今英國に起りし出來事は、吾船に來り之は直ちに印刷して船中五仙

の新聞となるのです(船中では毎日新聞は發行して居る) 十八日、信者だけが寄り集つて祈禱會を開きました。余は船長の許しを得て、船客四五百人に向つてゴスペルアロー即ち『福音の矢矧』とでも申す一寸した物を配ばつて傳道したのです。此夜は二等室食堂にて集りを開きました、集會者は五十名であつた、(三等の客は入れないのでした) 客種は大概伊太利亞人か猶太人である。十九日、學習院の教授渡邊君に船中で遭ひました。同氏は上等船客であつた、此夜も昨夜の如く傳道説教をした、何せなれば余は此人等に再會を期せぬからである。翌夜船中に音樂會がありました、私共は出席しません

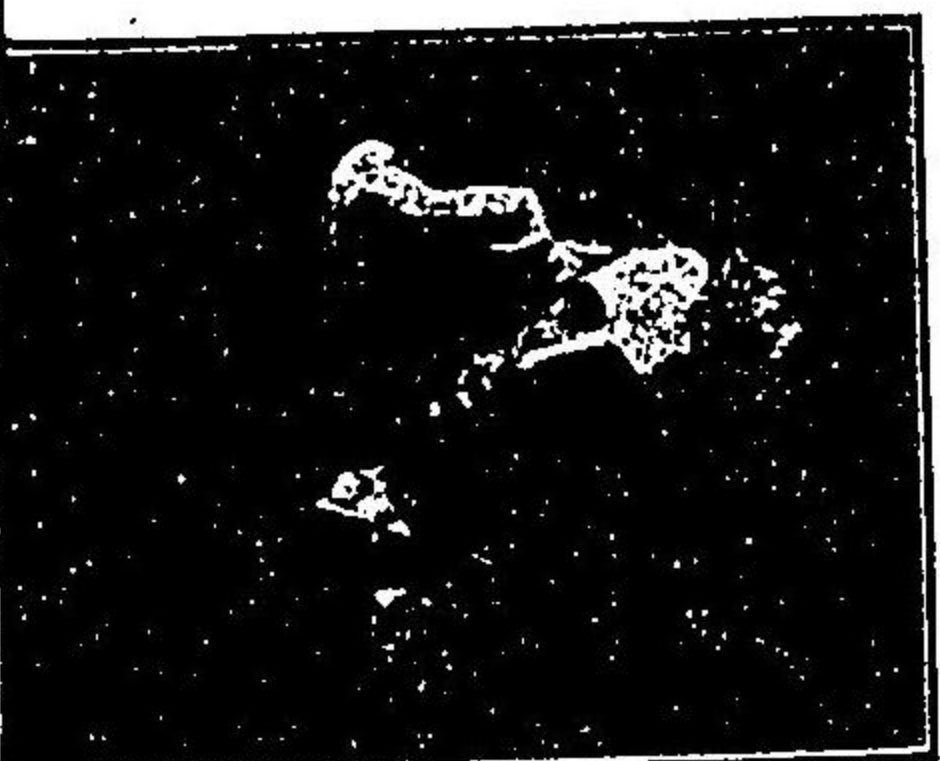
でした、只だ寄附だけのことは致しましたが、二十磅即ち二百圓集つたが、是れは船員の孤兒救濟所に贈らるゝのです。

廿一日、渡邊氏と大に日本社會改良問題に就て談話す同夜愛國クエンスタウンを着發し、翌日曜上陸の準備を整へ、午後六時愈々リヴァプール港に着す。此地は中々神戸や横濱の様な小港ではなく、萬事大規模なるには驚いた。此日は聖日なればとて停車場のホテルエキスチエンジ、ホテルに投宿す。

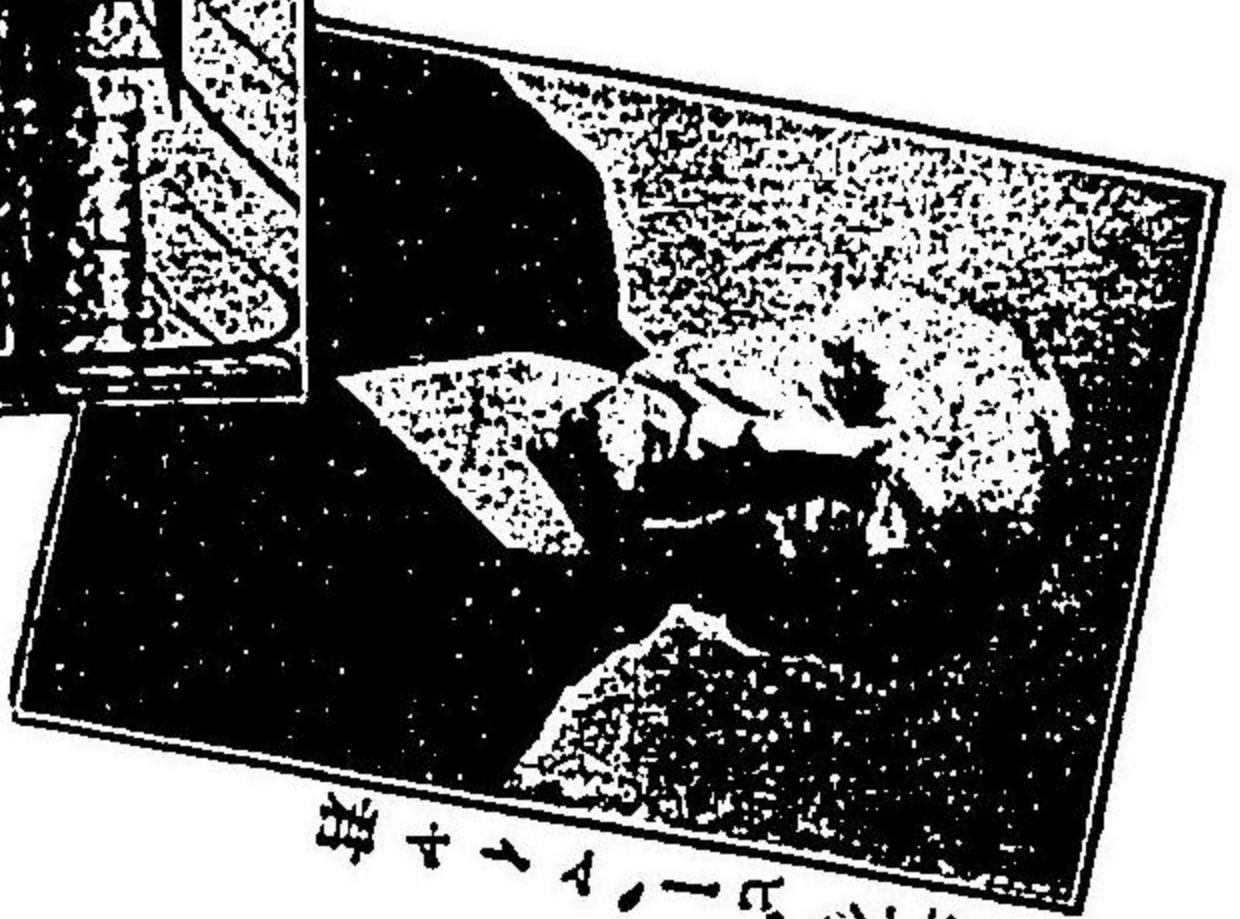
ケズイツク



クロキ氏



キクチ氏



ハラ氏



松野君



中野君



ケズイツクの全景

廿三日朝出發し、ケゾイツクに入りしは十一時であつた。英國の余に與へし最初の印象は日本に能く似て居るといふことである。國が狭きが故に寸地の餘裕なく、或は草花或は青菜或は葱と地を遊ばさず、能く植へてある。一ツおかしきことは隣合の垣は鳥渡した物で間に合ひそふなのに、大々的、永久的の石垣を以てしてあることである。米國ならば唯一本の烟突で間に合ふ處を、當地では室の數だけの烟突が屋根に突き出してある。山野も石垣を以て分割してあるのも亦そうである。さて此ケゾイツクとは所の名で、鳥渡した町あり山と水に富んだ風景の宜き處である。三十年前より毎年七月の終りの一

週間を、コンヴェンション週と定め、所謂キリスト者高等生涯即ちクリスチャン、ハイヤライフの大主義に基ける不偏無派の集合體である。本年の如きは八千人のキリスト者世界中より集り、爲めに三四千人を容るゝ天幕を二ツ張り、日々各六七回の集りを茲に開くのである標語は All one in Christ Jesus. (キリスト、エスに於て一也)で、日本人で来て居るのは大坂の松井君、日原君、東京の中田君、星野君、救世軍の二士官と余の七人でした。或日七人でボートを湖水に浮べましたが、日英の國旗を樹て先づ僕が東郷といふわけで、キャプテンとなつて楫をとり他の人々は皆水兵で中田君は整調であつた。併し船頭が多いか

ら船は山に登るといふ有様故、甲は右、乙は左するので流石の東郷も此時には困つたのであるハハ、ハ、ハ、ケゾイツクの集りは、日々六回乃至七回であつて、先づ朝起き顔を洗ふや否や、茶を喫し、ピスケットを噛みつゝ祈り會に出で、夫れから朝飯を濟し、直に九時の集會へ出で、十時に亦集りありて、正午午餐を爲し、二時よりの集會又時によると三時半四時も集會がある、國風として四時にお茶を喫し、集りに出で晚餐を了へて後又集りといふ譯で、日に六七回の集りがある能く集りに厭きないには自分ながら驚く位でした。

湖畔の個人傳道

百

或る日曜の夕方餘りに疲かれたので、博士キヤンベ
モルガン氏の説教ではあつたけれども、迎も之を聞く餘
地なき故、余は湖邊に遊びに往つて、靜かに今日一日惠
まれし話を沈思黙考して居る時、背高き一青年來り、我
傍の椅子に掛けた、そこで「余はあなたに二の問ひに答
へて欲しい」曰く「君は英國人なるや」曰く「然り」我
が第二の問は「君は救はれしや」暫時ためらいて曰く「私
は救はれて居ると考へる」「確かに救はれしや」と再び問
ひしに「私は教會の信者なり」「三度」「君はキリストの救

ひに預りしや」と問ひしに、彼頭を掻き始め「私は救は
れて居ると想像する」と答へた故に、余は「君は獨逸人
なりや」と問ひし時、彼目を上げ、直ちに「否、我は英國人
なり」と答へた、余は又更に「君は救はれしや」と語を
重ねて問ひしに彼れ大に考へ且つ點頭いた。余曰く「吾
は日本人なり、父母は日本人で日本に生れしが故に服装
は英國人に似たれども、吾は日本人たるを一刻も忘れた
事はない、其如く吾靈はエスキリストの十字架の功勳を
信ずると同時に、吾は神に生れしもの救はれたるものな
りとの確信は吾日本人なるが如く確信す、ア、世に己が
救はれしを知らざる信徒多きに困る」といふと彼れ余に

助けを求めたれば、余は約翰傳一章の十二節をば三度迄大音で朗讀せしめたのである、此句が自然二ツに分れて居るので、彼キリストを受け、彼を信せしものには神は力を賜ふて之を神の子となせりと云ひ自ら其職分が分れて居るのであると縷々説明したが、四十五分の後光明は彼が胸中を照らし込み、満面の喜びを以て感謝して歸つたが、彼の二人の兄はパフナストの宣教師で今アフリカにあるとの事である。

リバイバルの中心

當地に止ること一週間、非常なる恩寵を被むつた、此

間に余が特に敬慕する人はエバン、ロバートである、同氏はウエルス、リバイバルの中心點であつて、次にはミセス、ペンルイス、同姉は七八年前米國で遭ひし先生で此度は同姉の客分となつた、博士キヤンベルモルガン（靈界の横綱）の話には實に多大なる恩寵を得た、エフビーマイヤ、ウイペプロ、ヘット、ホブキンス、及びホルデン氏などは確かに靈の人であつた。

同地には始めて鉛筆を世界に供給した製造所がある、依つてこゝを見ました、今材料の木は米國より心は印度よりとの事である。

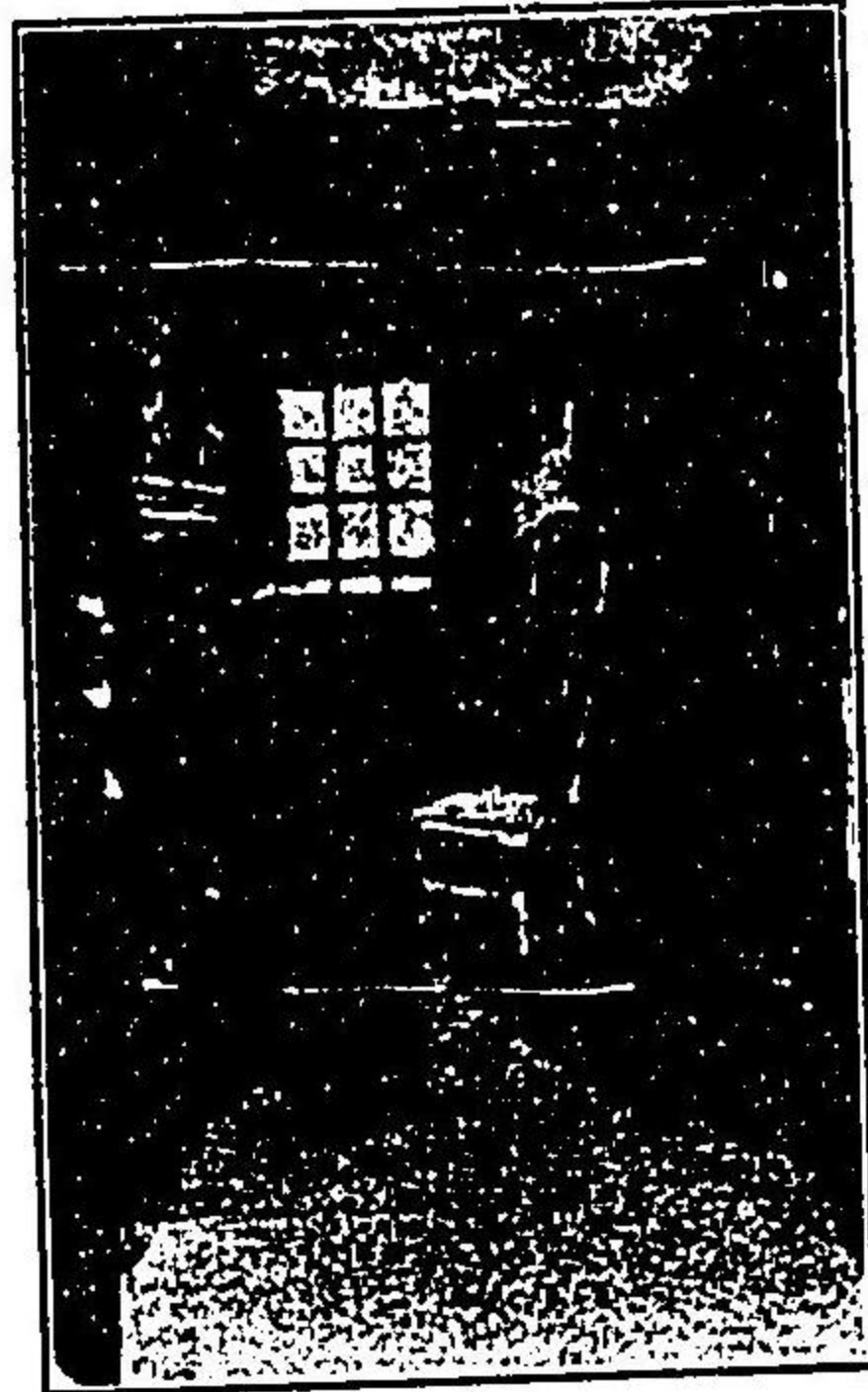
翌三十一日午前九時ケゾイックを發して途中カーライ

ル市で古いキヤセイドル(寺院)を見てグラスゴーに入り、Y、M、C、Aに投宿す。同館の完備せること、到底日本の夫れの比でない。

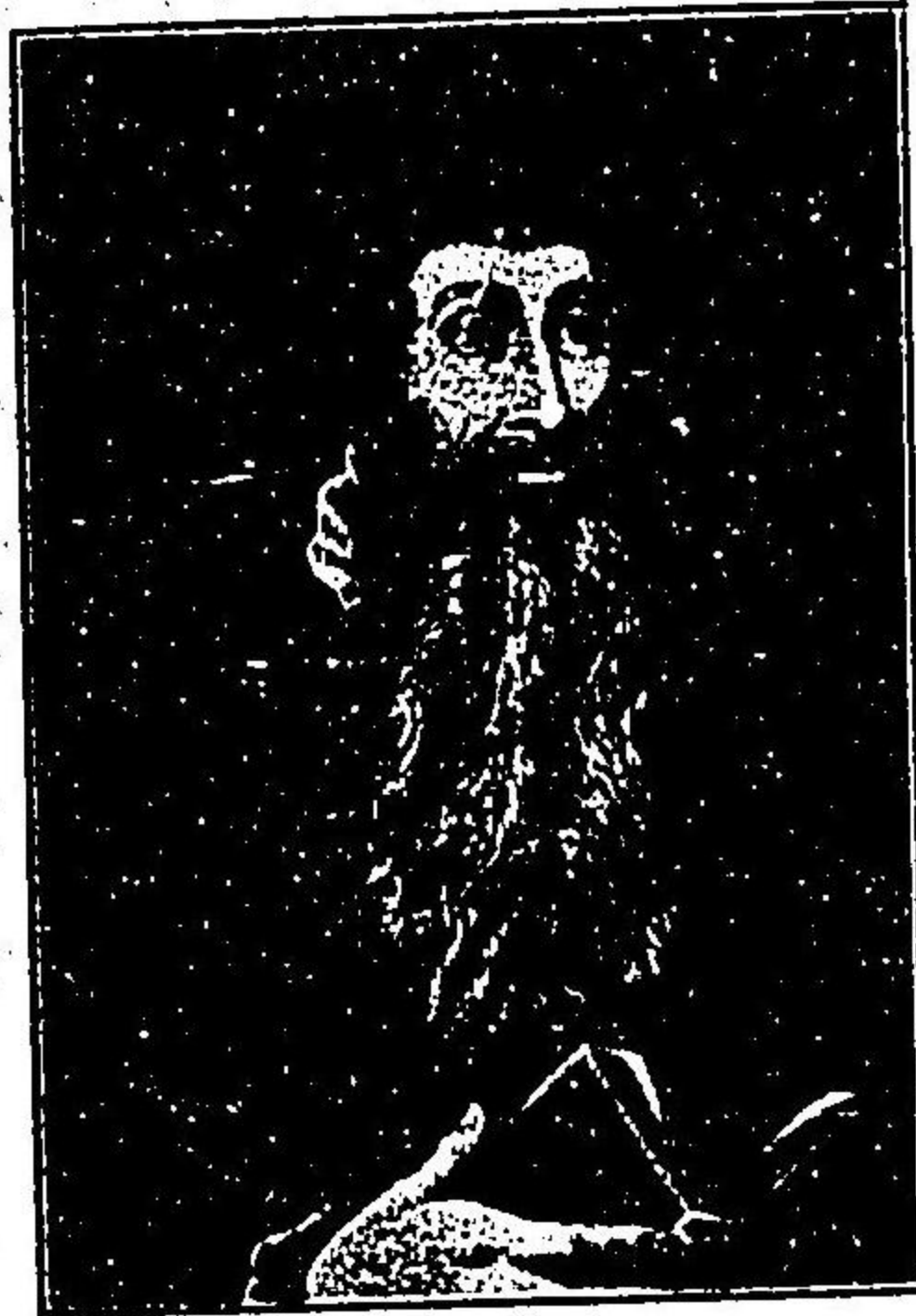
グラスゴー市

同地で日本軍艦鹿取が出来上つた地故、態々船渠まで往つて見たが、其大規模には驚きました。此街を遠くより望む時は街の上に一抹の黒雲の絶えざるを見る、之は即ち烟突より吐き出す黒煙である。以て工業の如何に盛大なるやを推知するを得るであらう。翌日は有名なる湖水に一日を費したが、折悪敷微雨蕭

エテンバラ市



祈の室



ジョン・ノックス



(ミッシェン)

中央の開ける窓はノックスの説教せし所にして其下は氏の家なり

蕭といふ有様であつた、併し非常に美しいには驚いた、
迎も松島などの及ぶ所ではない。

ジョン・ノックスの故地

八月二日星野君に送られ、一時間半の後エデンバラに
着す、此所は世界に聞へた市街であつて其壯麗なのは驚
いた。第一の見物は、詩人スコットのモーニメントで
ある、此街は城を中央にして溪流が其下に横はる、實に
天然の一大城廓である。

ジョン・ノックスの家は今に保存され、訪ぬる人をして
轉た古を偲ばしむ。彼が街に接したる窓より「汝罪人よ

悔改めよ』と、大々的に説教せし處今に存じて居る。余は茲で二時間許り遊びました。内には勉強室あり、座敷あり、祈の室あり、四邊の裝飾は生前其儘であるとの事家の中は繪ハガキ屋本屋などで満ちて居る。ノックスと申せば、我が師の家心地するのに、入場料は相當にとります。我が師の家を賣店とした。ア、午後二時鐵道局に於て百五十人の労働者に向つて説教を爲した。

此夜は非常な雷雨なるに拘はらず、三四十人ムーデー氏の助力に依り、設立したカスホルス、クロス、ミッシヨンで説教をしたが三人の悔改者あつた、天氣の悪しき爲め未だ嘗て悪い集りを持たことはない。如何なれば雷雨を

凌いでまでも泥土を犯しても來る人々が熱心であるからである、此夜はロバルトソン氏(ミッシヨンの主任者)方に一泊した。

此日の十時余は電報を以て招かれ、レデーバンクに避暑し居らるゝエデンバラの醫學博士シンブソン氏を訪ふ停車場に至れば日本では伊藤さんでも乗らぬ様な實に立派な馬車が、余を待つて居る、そして頻に我輩を眺めてミストル、カイミウレ(木村君)と呼ぶ、之れ即ち綴りの通り發音したのであらふ、依て氣をさかして返事した、處が『君のトランクは』と申されましたが、殆んど無一物で世界を旅行する我輩のこと故、唯小さき手カバ

ン一ツだけ先きに渡しました、夫れから馬車に乗り込むや、其心地よきとは生れて始めていある、荷なき爲めあやしそうな顔し乍らハイ〜の一鞭で、馬は砂煙蹴立ててホームに走つたのである、約二十分で達すれば五六人の僕等は、日本から来た傳道者と云ふ譯で門口に出迎へ非常な饗應であつた。家中一切がスコットランドの古風で、實に目を驚かした、米國では新しきもの、新案もの新發明と云ふて其の輕便を崇ぶも、同地では古きを愛し年代ものや歴史つきを崇び、萬事質素で保守的である、例へばベットの足でも、全で象の足の如く大きいし、机椅子一切のもの構造の豪物であると同時に非常に玲瓏で

ある、余は自轉車に十有餘年乗つて居るが、米國製は安價で輕便である、併し破損し易い、英國製は重く價も高いが長保ちする、是等がつまりらぬ事ながら、自然と國風を現はすものと思ふ。

ドクトル、シンブソンの子息は今故ヘンレ、ドラモンド氏の椅子を大學で占めて居られる温厚の君子でドクトル御自身は二週間前に英皇よりナイトの尊號を受けられ令聞は文學者である、而して叔父はコロ、ホルムの發見者で有名なる人である。

スコットランドを見舞ふ世界の有名な客は、皆先生に招かるゝそふであります。私も其の一人で、實に多大な

ツヨンノツクスの故地

名譽であると同時に、全氏に感謝する譯です。全氏の庭は一寸大隈さんのガーデン迄は参りますまいが、兎に角非常に大きなものであつた。

翌四日はエヂンバラなる同氏の本宅に参り、序に大學や公園をも見物した。

安息日の蘇格蘭

翌五日は日曜でしたが十時頃通路に出て見れば、非常に淋やかです。流石スコットランドですから、馬車一ツ走らす者が無い故、斯様に静な日曜の朝の景色を初めて見た。雖て教會に集まるべき時には諸教會の鐘が一度に鳴り



蘇國コンアトン、セル



スコツチ



スコツトのモーニユメント



草花で出来て運轉する時計

響きませんが、十三の鐘が音律に叶ふてある故に「吾御神
に近寄らん」「我君エスよ」「朝日は登ぼりて」と申した様
な歌を教會々々でヂヤン／＼と叩き別けるので、實に心
地よきものであつた。斯て老人は孫に手を引かれ、息子
は妹等をたすけ、夫婦は子供を連れてと云ふ譯で各々晴
着を飾り、教會に行く様、實に美と云はねばならぬ。日
曜の事などは餘り八釜しく云はないたちの私でした。是
非歸國したら大に叫ばねばならぬと思ひし事は澤山ある
此朝、博士マクラレンの説教を聴きいたが、教會は人
を以て満れて居ました、一寸茲で一言しますが教會に二
た通りあり、所謂エスタブリッシ、チャーチ、及フリー

チャーチです前者は國費を以て支へ、後者は自由の民が支へて居るので始終争ひが絶へません、これ所謂信仰の自由及束縛の衝突であらう？。

東郷！木村！

午後二時コンプトンヒルのネルソンの碑下に説教したが、其朝の新聞に曰く「東洋のネルソン即ちアドミラル東郷の國から、エバンジェリスト木村君が、今日の午後三時に吾がネルソンの碑の下、即ち故ホイットフフィールドの野外説教場にて説教がある云々」とてナカ／＼長文でしたが、東郷大將のお蔭で、我輩までが肩巾の廣くな

ったのは一奇談でした。時を期して往つて見れば、成程風多き山にも、二三百人許りチラホラ見へて居る、余は風を後に受け椅子に立ち上り、日本の歌が聞きたいならば「然り」と云ひなさいと云ふや否や、皆異口同音に然り然りと一人で五人前も返事する人が十四五人あつた然らば此所へと手招きすると、三百人許りは寄り集り、余は其の花の輪であたがやかで凜々とした聲で、十八番「亡ぶる此の世、朽ち行く吾が身」を腹一パイの聲で獨吟し、四分に亘る説教を試み、やがて例によりて例の如く悔改者を募りましたが、誰れ一人なかつたのです、募りて悔改者なくば余は負た譯である。故に火の如き熱心と溢る、

東郷！木村！

許りの同情を以て主の福音を説きました。やがて氷は解け一人二人、三人と遂に十二名まで決心者を出した。ハレルヤ！アーメン！！

元來此スコッチは日本の鹿兒島人で、ナカ／＼食へぬ人達です、キリストを信じなさい、ハイ信じますと申すとは、丁度敵にでも降参した様に考へる國民である故に、リバイバルの集りで感じてもアーメンとは申さず、漸く二日間過ぎて後牧師の宅に來り、初めてアーメンと云ふ様な國民ですから、夫れで一斑を知ること得るでせう。同夜は一昨夜話せし同じミッションで説教したが、三人悔改めました。神の御名は讃むべき哉。

翌六日古物館、ノックスの墓、教會及古城を見物した。扱エデンバラで一番最初に見た文字は、ホイスキーで、最後に見た文字も亦た同くホイスキーである。宜なる哉。土曜日の晩に説教して歸るや、僅か三丁の間に十三人の酒酔に出會ひ、又八人連れ、彼方へ四人此方へ四人で來たのをも見た、其内二三人は大道に犬の如く臥てしまつた、なせならば土曜日は俸給の渡る日だからである。日本でスコッチと申せばたれも靴下編む一種の毛と思ふ、なる程同國にそれが澤山用ゐて居る、しかし同國でスコッチと申せばホヰスキトの事である、スコッチは善にも強く悪にも強く酒にも強い國民である。

東郷！木村！

スコットランドの北方に至りて、朝は三時に夜が明け、夜は十時まで新聞が読める處へ参りました。乏は即ち北極に近い證據で、尙ほ北のスウェデン、ノルウエーに至れば、所謂半年晝で半年夜と云ふ事實の一端が知れるので、私は非常に面白く感じました。

ウエルス國

翌七日午前十時五分友人に送られて乗車し、ウエルスランドリッド市のコンダクションに向ふ、當地は所謂ウエルス、リバイバルの地であります、午後七時半同地に入り、ダクラスホテルに投宿しました。



ランドリッドの停車場に我が爲め送別に来りし兄弟 (右より八人目は木村)

此夜集會に出で来た人約二千人であつた。テントは一
で標語は矢張 All one in Christ Jesus 此の處はウエルスの國
民が大半を占めて居りました。當國民の語があるので余
等に通じない。此處の重なる談話者は、例のエバンホブ
キンズ、エフ、ピー、マイヤー、オミセス、ペンルイス及エバンロ
パートであつた。集は大概英語でやり舛が、感じて来る
と直にツシルチでやり出すので、余が十四年前始めて渡
米し、直に桑港マアケット街で英語説教を始め、中頃
面倒になつて日本語でやらかしたのを聯想した。此處は
司會者の必要な國民である。然して讚美歌の一二冊は
記憶して居る人々多く、第何番など云ふ必要なし。故に

時來りて、一人「わが御神に」と歌ひ出せば「近よらん」と千人一度に唱和する、それから或る一人聖書を読み、或人祈り、再び歌ひ、或る人證言を爲し、三度歌ふと云ふ様で皆なが司會者になつて居るから、其の自然的に秩序のあること、静肅なことには感心しました。午後三時、マツシヨナリ、ミーテイングに於て、露國人を見出したのである、ソコで余は「君が露西亞人で、吾輩は日本人である、今君を歓迎す」と云つて握手致しましたが、聴衆一同は或は立上り或は叫び、手巾を振つて歡聲堂に満つと云ふ様で、翌日の新聞に其模様を書立てた、夫は其所作が結局標語に適なつて居つた爲めである。

クリスチヤン國?

二日の後或るミツシヨナリの集りて、俄に吾輩に話を依頼されたので、實は準備がなかつたけれども、直ちに立ち話しました、「余はキヤナダ、アメリカ、アイルランド、イングランド、スコットランド等を通り今ウエルズに参りましたが、まだ所謂クリスチヤンカントリーなるものは見たことはないものである、あらば示して欲しい」と劈頭第一に遣り付け、眼中聴衆千五百の人々なき有様であつた。次で「諸君は心中我大英國だと申され様が、余は受け取られぬ、見よ阿片戦争は誰が罪ぞ、見よ支那

クリスチヤン國?

人を墮落せしむるは阿片にあらずや、罪果して拒んで戦ひし支那人にあるか、將た無理に其の利益を貪らんが爲め、強ひて之を買はしめし文明の大英國にあるか、斷じて云ふは大英國が神に對しての大罪である、故に彼の南阿の戦争に幾億の金と幾千の生命を失なひしに非ずや』と案を叩て迫りしが、若し日本あたりで此の通りに外國人に遣られたら實際其の通でもノークの聲四方に起り辯士質問位の事は是非起らねばならぬし、余も之は起るだらうと豫想して、戦を挑んだ譯であつたが、豫想は全く反し、二三十人立ち上り手巾を振りながら、異口同音に叫んで曰く『日本の傳道者の言はること事實なり、大

英國の耻辱なり、如何しても阿片賣却法案は撤去せねばならぬ』と大聲疾呼したのである。斯く大國民の胆の太きには余も吞まれました。第二に『商法とは云へロンドンに次ぐ大きな街、パーミングハムと云ふ都會で、印度と支那に輸出する爲、佛像製造所のあるは何んぞや』と彼等に切り込み、第三はホイスキーの問題であつた、司會者は直ちに祈會を開き數人熱心之が爲めに祈つたが、其愛らしき精神は擲すべきものであつた。此話が非常に持て、寫真屋は余を撮影し、其繪ハガキが廿五錢で賣り初めました、燒き立てられぬ位賣れたと云ふことです、寫真を賣られたのは余の歴史では空前で

亦た絶後である。

十一日の朝六百人を容るゝメソヂスト教會にて、木村が説教することに定まりましたが、千人計りの人入り來り、堂に溢れたのです。「ペテロの信仰」と題して話しましたが、皆な能く聴て呉れました。集金は百圓有りまして之は教會の借金に寄附致しました。英米の教會の罪惡は無暗に華美を競ひ、教會を抵當に入れても石造の教會に入りたがる、ア、神は此の如き教會に住み給はぬ。

鏞泉

同地には鏞泉がありまして、其泉水を飲む爲め、年中

千人内外の患者が絶へないのである。一週間一圓二十錢の切符で日に三度づゝ、其れを飲みに行くが、余も同地滞在中病氣はなけれど、尙丈夫に成る様にと思つて呑み始めました。が、コップに半分でモ一御免蒙りました。呑付た人達は毎回大コップで六七杯遣るとの事ですが、四週間の後は體全體のシステムが變るそうです。兩朝早く同鏞水を飲みに来る六七百人を相手に福音を説きました。が、中々愉快な合戦であつた。

エ氏の獨舞臺

十二日より後はエバンロバートの一人舞臺であります

エ氏の獨舞臺

た、此人は祈りの人で、その身體は、一種別な元素で出来て居るかと思はしむるまで熱心な人で、日本人の熱心など、は風の違つた熱心家である。氏は下宿屋から追ひ出されたのと、其理由は餘り晝も夜も祈禱を續けるといふ爲だとか、此の一事でも一寸其一斑を窺ふに足ると思ふ。同氏はまだ廿五歳位の青年であるが、實に一切を神に捧げた人である、氏の説教は僅か五分或は十分で夫より長い話は殆んど聞たことがないのですが、祈り詰めて来て話すのですから、非常に力がある。其要に曰く「取れ々々エスの勝利を汝の物として取れ、エスの勝利は君が物を吾物ぞ信仰を以て取れ」と申して椅子に掛り祈らる

るが、私共の一時半の説教よりもまだ疲勞せらるゝ様である、言は非常な力があるので骨身に浸み渡るを覺へる次第です。預言者の勢を以て話さるゝ同氏の話により多く叫び出す人や、或は氣絶する人があるのを度々見受けました。
十五日午前十時、五六十人に送られランドリッド市を後に見てバーミンガムに向ふた。

バーミンガム

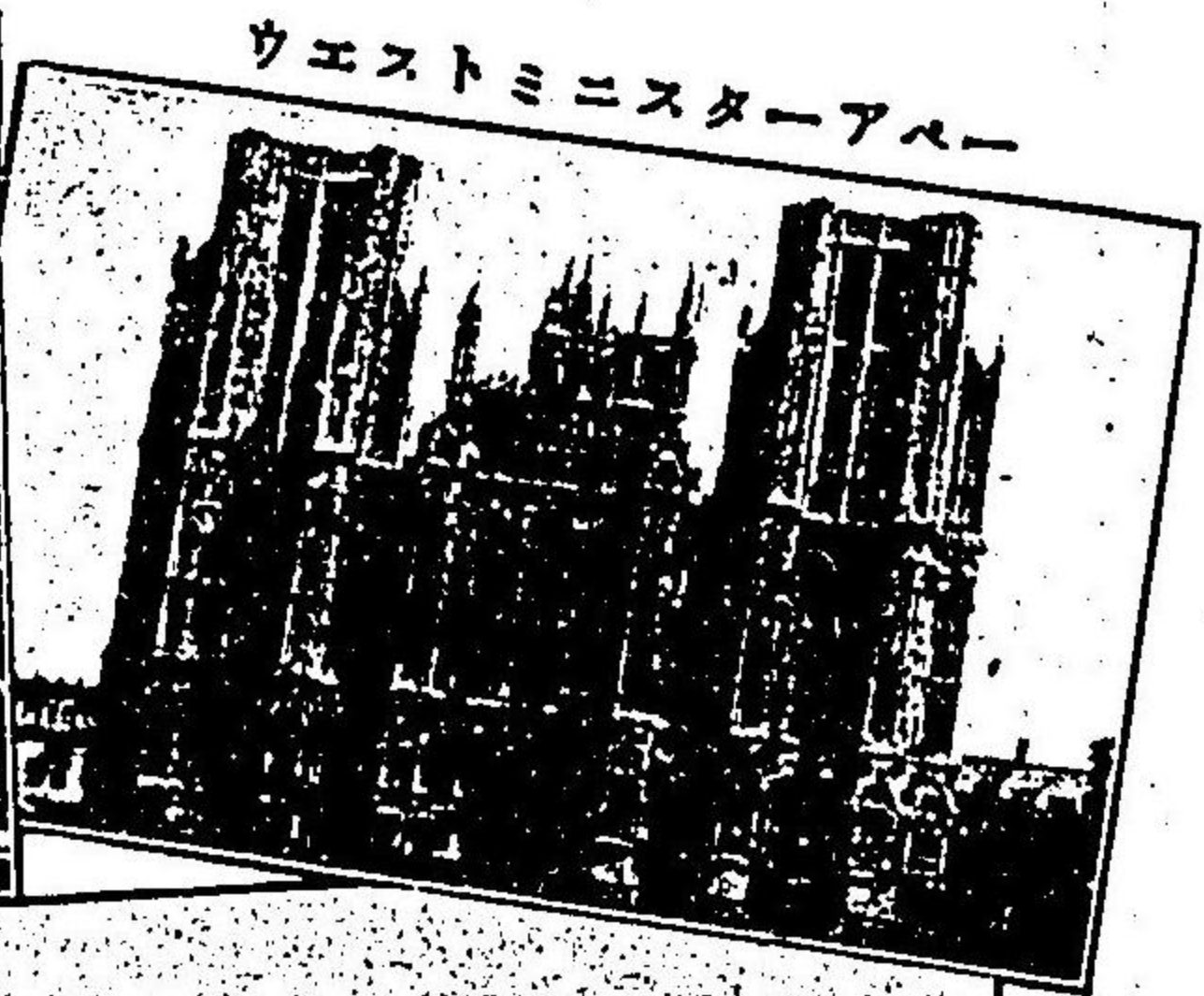
これ偶像製造所攻撃に赴いたので、Y.M.C.Aの助により製造所を尋ねたれど見當らず詮方盡き野外に立て説

教を始めましたが、百人位ひゃくにんぐらゐのよき聴衆ちやうしやうありまして改悔者かいくいしや十名じゆめいを得たのである。人の攻撃こうげきは悪魔あくまの方ほうに向ふた。

倫敦

十六日じゅうろくにち愈々いよいよ倫敦ロンドンに入り、時は十二時半じふにじはんでした。支那傳道會社しなでんどうかい本部ほんぶの客きやくと爲り、此夜このよは街の夜景やけいを見ました。酒屋さかやの多いおほいのに第一だいいち驚おどろいた。

十七日じゅうしちにち世界せかいに名高なだかきブリテシユコミュニゼアムを見物けんぶつしたが、聖書せいしょの原本げんぽんやら種々しゆしゆ有益ゆうえきな品しなが澤山たまたまありました。往々むじむじ中に、日本にっぽんの部ぶがあつたから注意ちやういして見ますと、稻荷いぬいの祠堂しだう、佛壇ぶつだん、千手觀音せんじゆくわん、石地藏いしじやう、神興かみこし、神樂面かぐらめん



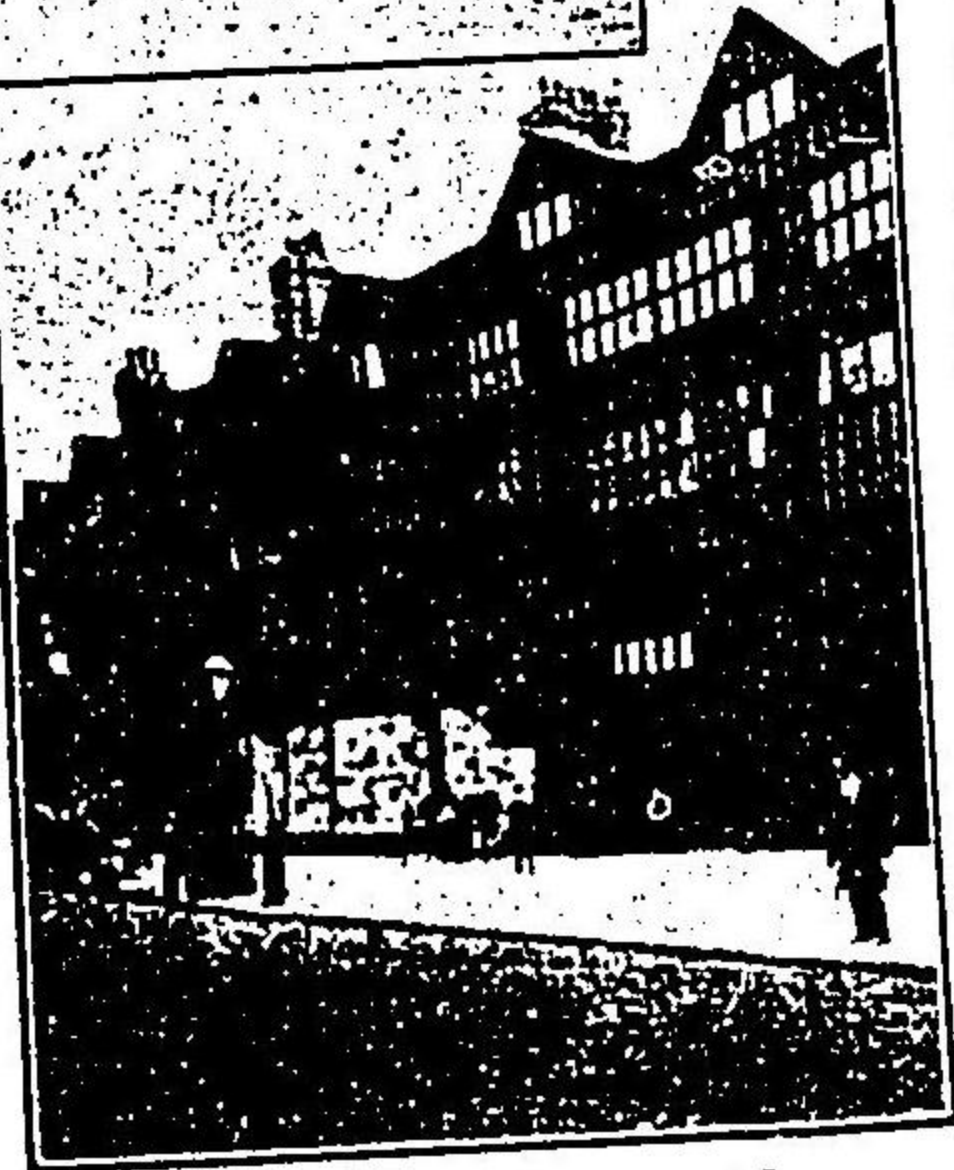
ウエストミニスターアヘー



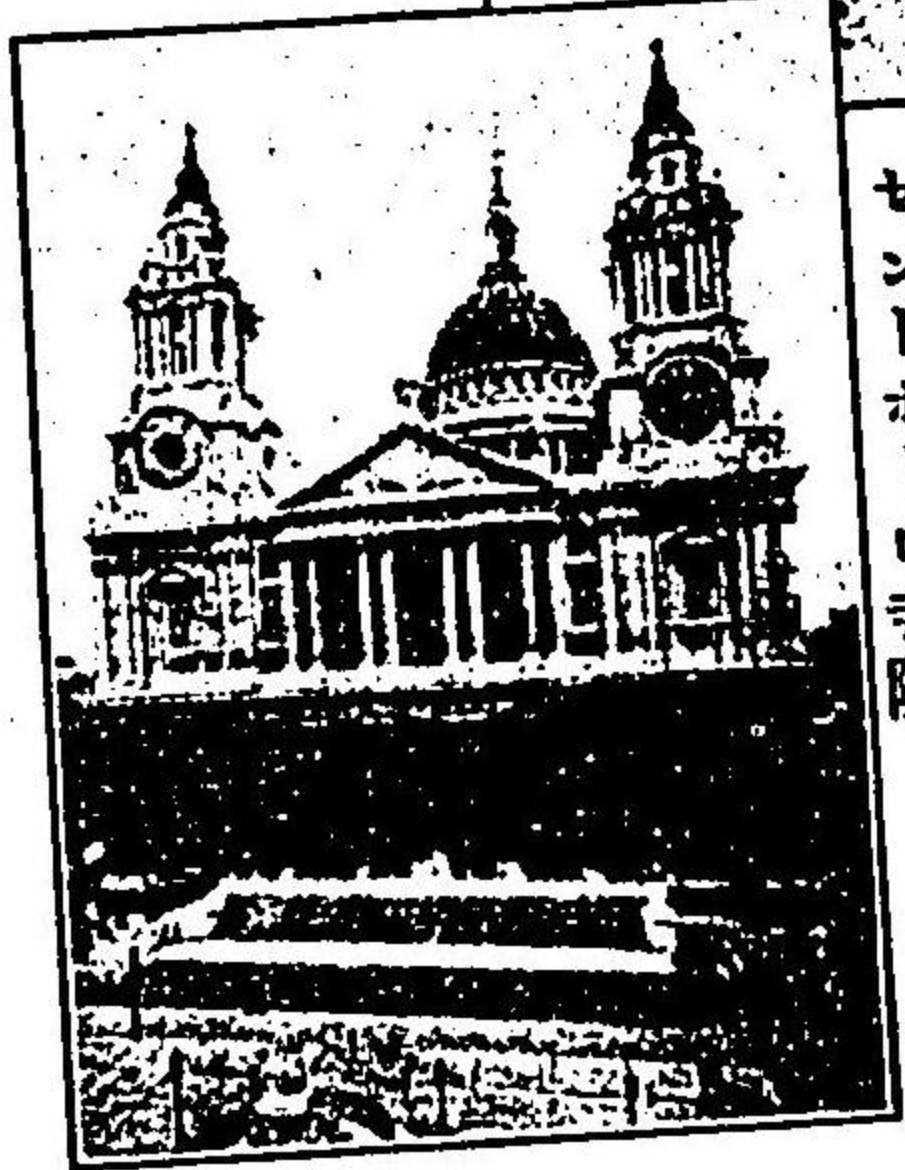
クロンウエルの像



ハウス、オヴ
パアラメント



ロンドン最古の建物



セントポール寺院

幣束、枕、草鞋、下駄、元祿模様の衣服、蒔繪、及び正
宗位な處が漸く目に止まつた。其他百萬遍の珠數が釣り
下げられてあつた位で、世界文明に何一品我國より貢獻
したものがなかつたから、觀覽人は余と出品と見比べて
居るので、誠に氣耻しく感じた。當所は確かに六ヶ月間
研究する材料がある、ア、帝國博物館いづくにかある、
實に去ると尙ほ遠い。同日は動物園を見ましたが随分珍
敷いものが澤山あつて、デラフなど申す巨獸は水中にあり
形は牛に一寸似て大なるとその十倍、食物はパンなら十
斤位一度に投込まねばならぬと云ふ譯である、大蛇は胴
の廻り三尺位にして長さ五六間かと思はしむるものがあ

ります。其他數限りない。

翌十八日ハウス、オブ、パーラメント。ウイストミニスター
1ペーに往つたが、その全美を盡せるには驚いた、二三
の畫の展覽會にて所謂マスターピースが、彼方にも此方
にも澤山ありましてお話しするに煩に耐へぬ。

ハイドパーク

翌日の日曜は教會を見物し、午後は有名なるハイドパ
ークに行つて演説を聴きましたが、此公園の大きさは日比谷
公園を五六十も合せたかと思ふ程であつて、數萬の市民
が新しき空氣を吸ふ爲めに出來て居るのです、此パーク

丈が如何なる無政府黨でも、社會主義でも、説教者でも
何んでも言論の自由のさく場所である。

馬車屋の路傍傳道

櫛の木の下にシルクハットを戴いたフロックコートの紳
士が説教して居るので、余も之に耳を傾けて聽て居たが
余の牧師のチョッキ（ボタンが横にあるもの）を着てる
爲に、傳道者なることを知られ、遂に一場の話を致しまし
た。改悔者十人あつたのです、後お茶に招かれて紳士の
ホームに参りました、スルト往く道が段々にせまく成り
ました上に、厩の近所に連れて行かれ、遂に馬が一二頭

居る戸を開ひて「君よ登り給へ」と勸められたが、其人は馬車屋の主人であつて其ホームの中が馬の臭みで満ちて気分が悪るかつた、併し彼れ夫婦の暖かな親切には溶かされた。此人は日々路傍で賃馬車が仕事であるが、日曜さへ来れば立派に着飾つて公園に説教に行く人である、私は其篤心に感心した。お茶の後再び出掛け、三度戦ひましたが、更に九人の改悔者を得たのである戦へば必ず勝つ、ハレルヤ!

博覽會見物

翌日、會社で船の切符を調べ、午後殖民地博覽會に行

き、印度、アフリカ、オースタラリア、カナダ等より到來せる殖産工業品及び古物を見る。印度の出品を眺むるに或は金或は銀或は寶石で作れる種々様々のもの分捕り來りて茲に出品せられてあつたので、東洋人最負の余のことにて頼まれもしない印度人の爲めに非常に立腹し、一人で印度人の腑甲斐なきを罵り且つ歎息し、ア、亡國なる印度の國よ、一人の愛國者なきか。

廿一日は會社が切符書き間違ひの爲め一日を徒費し、廿二日オーストリア博覽會を見る、誠につまらなかつた廿三日博士キャンベルのセテーテンプルに行き、後蠟細工の博覽會へ行き、入口で切符を求めんすれど、一人

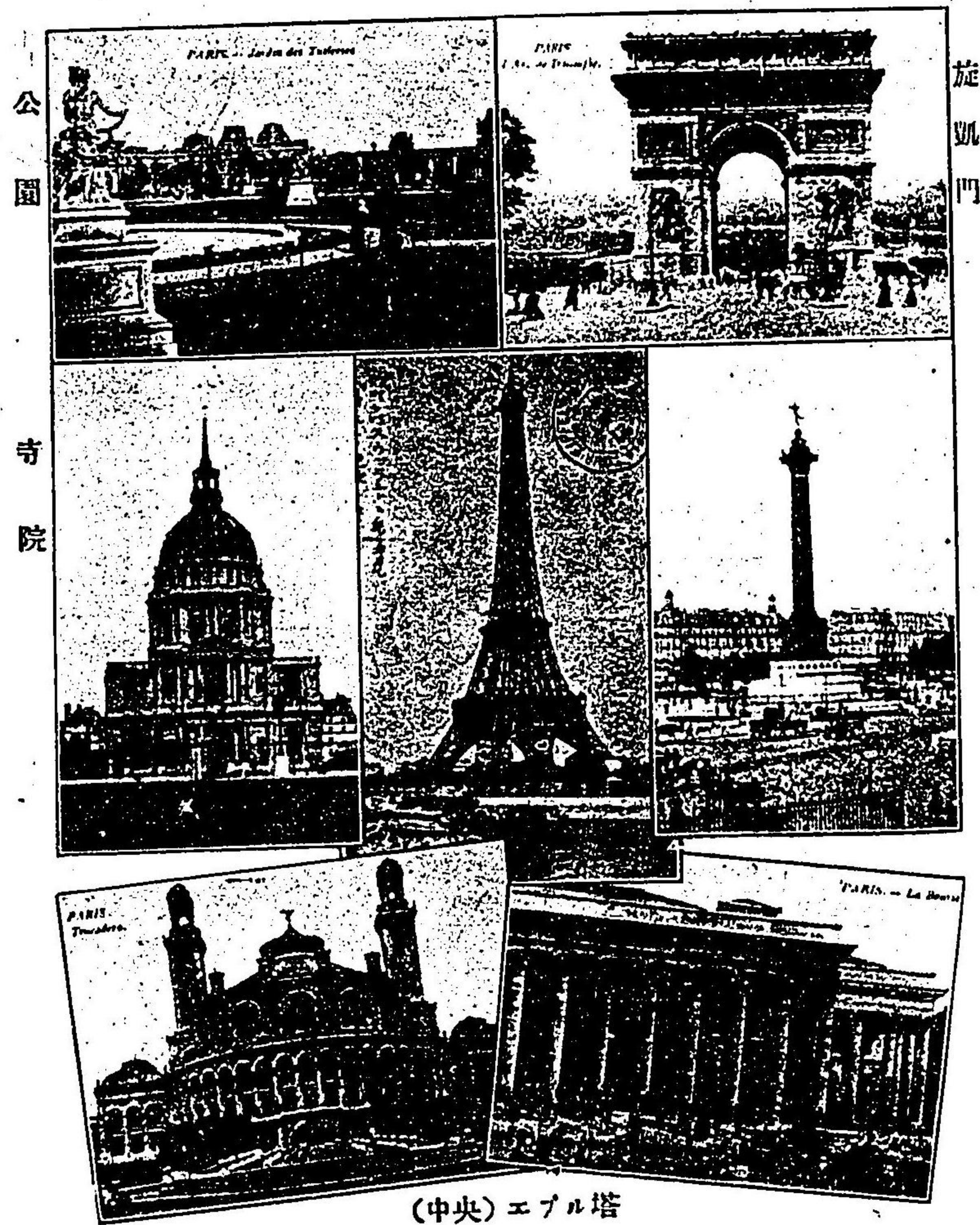
の女新聞を讀みて動かさず、再び三度するも返答なき故、
 覗いて見れば思ひきや、之が蠟婦人であつた。さても我
 輩は赤ケツトである、其向ふに巡查或は兵隊が立ち居る
 も皆蠟型也、或る田舎の老婆連が、一日茲に來り論じて
 甲は之れ蠟とし、乙は曰く否な實物と云ひ、遂に甲は試
 験の爲め「私が往て之を試さん」と云ひながら二本の指
 で臍のあたりを突きたのである、處が蠟の巡查叫で曰く
 「今一度遣ると縛るぞ」と、斯く叱咤られ狐鼠く逃げ
 たと云ふ程眞を穿つて居るのである。内には世界に有名な
 偉人達の像がある、東側には畏れ多くも我 陛下及山縣
 大山の兩元帥を初めとし、東郷上村其他十數名の像があ

る併し物になつて居らぬ、元來西洋人が日本畫を造ると
 云ふは不可能で又日本人が洋人の所謂粹なるものを畫く
 とは殆んど不可能である、其左側にザーを始めとしアレ
 キシフ、マカロフ、ロジエストウエンスキー其他數十名
 の者も見へた、其外昔の泥棒や殺害の様其儘に出て居り
 ますが、實にすごいものである。
 此日ゴルトン嬢を訪ふ同婦人は大の日本最負で、下田歌
 子は同家で勉強されたとのこと、伊藤侯の書生時代のこ
 とをも能く知つて居れる、同嬢は目下我圖書館の爲、書
 籍を集め居られる、此夜英國貧民窟を視る、實に言語同
 断である、ロンドン位世界で婦の酒飲む國民はない。

廿四日イスラエルの民の昔のタバニクル(天幕)に就て名に聞こへた人に遭ひました。午後支那内地傳道會社のテトラ夫人に會ひ、同夜八時友人に送られて英國を去つて巴里に向ふ。

呀巴里市

大割引の列車と汽船で佛國巴里の巡覽に出掛けたが、波止場に着早々注意を惹いたものがある。夫は海上に向つて高く建てられて居る十字架上のキリストであつて、之を仰ぎ見た余は敬仰の念を起さずして、寧ろ厭な氣持がした。是が天主教が表面丈に現はれて居るのだと思ふ。



(中央) エッフェル塔

公園

寺院

凱門

たからである。
さて愈々上陸して汽車に搭じ、二時間許りで巴里の都
に脚を踏入れた。嘗て家屋の宏大美麗なるを、噂には
聞いて居たが、實際に見て大に驚いたのである。ロンド
ンやニューヨークにさへ見出し得ざる美を極めた建築な
どは目を眩する許りであつた。愈々下車するや盛装の女
が處々にまごづいて居るが、これは所謂淫賣婦であつて
大抵客引をして居るのである、或女は余に對し恰も舊知
の如く挨拶するから、最初の内は普通のレデーだと思ふ
て英語で一言返答をしつゝ、夫れと感づいたから、直ち
に『サタンよ退け』の勢で靴を提げて道を急いだ。斯く

て電車の来るを待つて居ると、また他の女が来て荷物を奪ひ親切氣に世話した。處がこも亦た是等醜業婦であつた。斯くて余は滞在僅か二三時間なるに前後十二三回同様な目に逢ふた。其上狡猾な行商人は云ふも口の汚れる圖畫を賣りつける。吁世界に類なき美麗なる巴里市は此醜業婦を以て満されて居るのである。されば一見美に見ゆれどもハートは神に對して百萬マイルの間隔があると思ふた。ア、我が國果して幾マイル?

咀はるべき市街

廿五日、余は五頭立の馬車で、廿五名の乗合ひ客と市

中を見物した、行々種々の建物や博物館、動物園、圖書館、天主教會堂、會社、銀行、郵便局などを見物したが其宏壯巧致なる到底筆紙のよく盡すべきにあらずであつたが、唯だ厭やに思ふたのは、公園内處々建設せられて居る石像や銅像である、これは男女の隠すべき處までもあらはにして居ることです。斯様なことは他國にはありません——之れが佛國特有のものである。

一夜市中を散歩したが、公園中にある大通と思ほしき處は、一切プレチエアの爲に公開されて居るが、恰も大阪の道頓堀か、淺草の奥山の光景其儘である。飲食店や居酒屋には無數の醜業婦が見ゆる。余は至る處の市街で

説教するのは習慣であるから、一つ試み様と思ふたけれども、佛語は話せず、また遂に通辯を得られなかつたから、遺憾ながら止めねばならぬフツゴがあつた。

エブル塔にも昇つて見たが、見物料は一圓二十錢を要した。此塔は頂上に佛國の旗を翻へして居る。此最上階から巴里市の殆ど全部を展望することが出来るが、まるで錦を敷き或は絨緞で蔽ふた様に見へ、中々に美しくかつた。此間に巍峩たる建物を處々に見るが、其多くは天主教の寺院である。

廿七日、子供の土産にと、四フランで小人形を求め、次でスウヰツルランドのルザン市に向ふた。

世界のパラダイス

ルザン市には英國で恵みを受けたレガメと云ふ傳道師に招かれて、此人を尋ね、次で青年會に赴き五百餘名の聴衆に對し、禁酒禁煙の説教を試みた。處が直に改悔して禁酒禁煙を誓約したものが十三名であつた。

當地は風光明眉の湖水がある處で、翌朝早く起き出て之に對すれば、一種云ふべからざる快感を覺へた、よく人が世界のパラダイスと云ふが實にそうである。

二十九日午前は市中を散歩し、午後二時祈禱會に出席し、需めに應じ六十餘名の小兒に對し禁酒禁煙の説教を

瑞國ルザン附近の街



佛國農婦



瑞國、湖水と群羊

REGION
D'EDIFICATION ET DE REVEIL

à 7 h. du soir

Car Dieu a brémené
ainsi le monde
qu'il a donné son
Fils unique
afin que quiconque
croit en Lui
ne périsse point
mais qu'il ait la
vie éternelle.

Et Il en viendra
d'Orient et d'Occident
de Septentrion
et du Midi qui seront
à table
dans le royaume
de Dieu.

PAR
M. KIMURA
PASTEUR JAPONAIS

INVITATION CORDIALE A TOUS

スカットランドに於ける
傳道集會の廣告

した、進んで誓約をしたものは殆ど全部であつたのは、
實に感謝に堪へざる次第である。ハレルヤ！
當地は有名な葡萄の産出地で、隨て良き葡萄酒を製出
するが、一方には禁酒に熱心な人達の多いのは中々面白
いコントラストであつた。余の演説は翌朝の新紙に掲載
されたが、余には遂に一字も讀めなかつたのである、否
なたい一つあつた、それはH. S. Kimuraと云ふ一句である
それに我が寫真が出で居たのが知れた。
翌三十日、午前ルザンを辞し、セネバ、リオンの二市
を見物し、再び乗車して善美を盡した自然の大景に接し
午後五時地中海の第一港で、佛國の最良港たるマルセイ

ルに着した。

地中海第一港

汽車中で獨逸人と談敵になつたが、彼は英語を解せず
余は獨語を知らないから、終日唯だ手真似で語り合ふた
同人はパンと葡萄酒を出して飲食せよと勸めて呉れた
依て余は天を指して、基督者だと云ふことを示したけれ
ども、充分わからなかつた様であつた、兎角半分も通せ
ぬながらも、あまり飽きずにマルセールに達したことを
喜んだ、陸の旅したが之れが始めである。

マルセールには恰ど佛國博覽會があつた爲め一寸見物

したが、大陸博覽會にも劣らぬ有様で、建物の宏壯なる配置の整頓せる、到底大阪や東京に於ける大博覽會などの及ぶ所ではない、流石に佛國である。

言語不通の不便

言語の通せぬ旅くらい嫌なものはない、此方が字引を引き乍ら語り、先方は親切にもペラ／＼と答られるので却て困る、佛國とス國で大に閉口したから、獨逸行は見合にした。「旅人を惡にせよ」或は「我が旅せしとき我を宿らせよ」云々の意が直接に感じました。

埃及の七回

地中海々上

卅一日、午前十時半ビーオー會社の汽船でマルセールを發した。幸か不幸かしらねども二等室がないので、一等の客となつた、これ余が生れてから始ての贅澤である（海岸で藝人が手品をしたり、音楽を奏して、客に錢を投せんとを請ふて居た）さて愈々出帆したが、地中海はさながら鏡面の如く、實に平穩な航海であつた。同クルの一客に蘇格蘭人が居たが、此人は大の日本人最負で、「日英同盟ビヤンザイ」と云ひつゝ熊の手の様な手を

出して緊かと握手し『私日本美術よろしい』と愛敬を振廻し、次でオハヨ、コンパンハ、サヨナラなど亂發した。

説教なき禮拜

九月二日は聖日であつたので、英國風の集りがあつたが、説教のない禮拜である、今其模様を記さう、此日午前十一時、船中の鐘がガン／＼鳴る、恰ど市中の教會の様に、すると船客は平生教會堂に出席すると同様衣服を着換へ、續々一等のサルンに集つて来る、すると船長は自ら司會者となり、讚美、祈禱、聖書朗讀の後、詩篇の交讀をなし、献金をもし、讚美の後主の祈を共にして終

のである、其間約四十五分。一切の式は聖公會の儀式であつたから、説教がなくとも潔き心となつて己が室に歸ることが出来た、ア、彼等は説教を聴く爲めに教會に赴かずして、神を禮拜する爲に行くのである、さても歎美すべし哉。

海上の靈戰

此夜船長の許を得、自分で左の如き廣告をした。

The Gospel Meeting Conducted by the Japanese Evangelist at the First Saloon, 7: p.m. All Are Welcome!

傳道集會、日本人傳道師により上等食堂にて午後七

時より開會、誰人をも歓迎す。

此廣告をなすや、澤山の人が集つて来た、中にはオルガンを奏する人あり、獨吟を申込ひもあり、祈を捧ぐるもあり、頗る良き集會であつた。余は眞一文字に主の十字架を説き、次で覺へず知らず飲酒の大害を爲すものなることを大々的に抗撃した。所が聴衆の中に、彼の日本人最負の蘇人が居たが、彼も亦た抗撃さるゝ側の一人である、余は同テーブルの好を犠牲に供して抗撃的説教をしたが、蘇人マーク君は、大に余の精神を快なりとし、猶ほ斯道の爲に盡力する様にとて五十圓を呉れた。此夜は牙へ渡る明月を仰ぎ、英傑ナポレオンの生れた

コルシカ嶋を望み、大小嶋を縫ひて進航したが、其昔バウロが此邊を傳道したことを思ひ出し、今自分が一等船客で通行するのは何だか耻しい様な氣がした。

四日夕刻、スエズ運河の起點たるポートセツトに着し水夫俱樂部の主任傳道者ロツク氏に招がれて其家に泊した。同地は非常に暑く、寐苦しかつたので、夜中幾度か露臺に出で、涼風に接さなければならなかつた。

カイロ府に向ふ

五日、午前八時發の列車に搭じ、埃及カイロ府に向ふた、此處は所謂デルターの傍である、文字に寫たデルタ

カイロ府に向ふ